91-88
ヨ8K59

松下大三郎著

日本俗語文典全

東京　誠之堂藏

例言

一、本書は、百般の科學發達せる今日未吾人が日常思想を通ずる所の活々たる我が大日本帝國の口頭語を研究せるものなきを嘆じ、聊斯學のために貢献する所あらむとして著作せるものなり。

一、國語は日常我が思想を通ぜる殆唯一の方法にして、之を社會の上より觀れば社交の要具たり、國家の上より觀れは國民統一の要具たり、人類の上より觀れは人智發達の要具たり。萬般の實用娯樂殆一として國語によらずして成立するものなし。國語は實に國家的精神、國民的個性の發して形にあらはれたるもの、國語の聞ゆる所國家あり、國語の通ずる所我が生活範圍なり。フムボルド曰はく國語は眞の故郷なりと、獨逸の國歌に曰はく、獨逸語の響く所凡てこれ獨逸國と、國語は國家の源因要狀にして國家は國語の結果なり。國語なければ國家ある

ことなく、國家の必要なく國家存立するゑとあたはぜ。國語は實に國家の重鎭なり。百萬の騎馬鉄甲よりも重きは實に國語なりけり。されどゑれ實に生々活々たる現代の口頭語をいふものにして、彼の唯單に筆頭にのぼる所の古語をいふものにあらざるなり。古語は今僅に筆頭に上るのみにしてまゑとは古代の口頭語なり。古語は古代にれける國家の要具にして現代にれける國家の要具は現代の口頭語なり。然るに我が國多數の言語學者ありと雖も、いまた生々活々たる我が現代の口頭語を研究するものなきは如何。我が國民の教育を司る小學中學に於て現代の口頭語を教へずして可なるか。方今、國字改良、國語改良、言文一致等の論盛なりといへども、これらの問題みな現代語の研究を待つて始めて決せらるべきものならずや。現代語の研究豈忽にすべけむや。とれ余が菲才を顧みずして本書を著はし、人跡未到らざる沃野を開墾して國家の寶庫たる新開地をつくり、且つは懦眠せる我が言語學界に一打擊をあたへんとする所以なり。

一本書は實に日本俗語文典の嚆矢なり。邦人の著書尙一としてあるをなく、たま〳〵外人ブラウン、アストン、チャンバアレン等各その著あれども全く見るに足らず。アストンの日本俗語文典 Grammar of the Japanese spoken language の如き書冊堅牢紙數亦少なからざるを以て一見完全なる日本俗語文典の如くなれども、日本語の智識なき外人が其の僅に見聞せる所を基礎として書として何の價値あるものにあらず。故に予が本書を編するに當つて、尋ぬるに師なく、考ふるに書なく、著者たゞ唯一の論理に携はり、言語の先天的形式を求め、壯大緻密なる此の一大國語を研究せるなり。故に所說一として著者の創見ならざるなし。その未しき節多きは創設の際また免るべからざるなり。

一、本書は明治卅二年十一月より國文學界に掲げたるが誤植甚少なからぬ。此の書に由つて訂正せられむことを望む。

一、予が國語法學に對する概念は本文四頁にのぶるが如く國語が客觀にあらはし得る主觀的（内容的先天的）法則とうの主觀的法則を客觀にあらはす客觀的（外形的後天的）法則とを研究するものなりといふにあり。故に本書は全篇此の主意によりて說けり。

一、本書もと三百頁の小冊子著者が語法學に對して考ふる所の頗はしき科學的形式によつて說くべくもあらぬ。此を以て便宜法により簡單なる形式によりて之を說ける所少なからず。その詳論は他日また公にすることあらむ。

明治卅四年七月

著者識

語尾變化の說、備考

著者は我が口語には動詞形容詞のみならず名詞代名詞も亦語尾變化あるを信ず。たとへば「ッキャー（月ハ）出タ」「ッキン（月ノ）中」「ッキョー（月ヲ）觀ル」「ッキー（月ィ）雲ガカヽル」の「ッキャー」「ッキン」「ッキョー」「ッキー」なぞのごとし。或は之らを、月ハ、月ノ、月ヲ、月ヘの音便にして語尾變化にあらずといふと雖、是語源論を以つて文法を說かむとする誤謬なり。語尾變化とは詞の下部の變化なり。ッキャー、ッキン、ッキョー、ッキー等皆詞の下部に變化を見る。其の語尾變化なること明なり。之を漫に音便なりといふが如きは是唯語源の說明のみ。文法的說明にあらず。此の如くにして文法學は甘んずるものにあらざるなり。必や或は之を語尾とし或は之を助辭とせざるべからず。今ッキャー、ッキン、ッキョー、ッキーは、その語源はハ、ノ、ヲ、ヘなるを以つて之を助辭として「月」より切り放ちうべきも、ッキャー、ッキン、ッキョー、ッキーの「ャー」「ン」「ョー」「ー」は「月」と融合して之を「月」より切り放つべからざるを如何にせむ。舊文法家と雖之をハ、ノ、ヲ、ヘの音便とはすれぞ直に之を助辭とする者なし。その助辭にあらざるとは何人と雖辭むと能はざる所なり。故に余は斷じて曰はく、ッキャー、ッキン、ッキョー、ッキーの「ャー」「ン」「ョー」

「ー」の如きは之を語源學より觀れば音便にして、之を文法學より觀れば語尾なりと抑語尾といふものは多くはもと助辭又は詞より由來せるものなり。たとへば見ヌル見ユルなどの語尾ヌル、ユルは助辭のヌル、ユル（殺サヌル殺サユルなどの）より出で、遠ケレバ、近ケレバなどの語尾ケレはク有レの約、カレの通音より出でたるものなり。然るにもし、語源が詞又は助辭なるによりてヌル、ユル、ケレは語尾にあらずといはゞ、語尾といふもの遂に存しうべきか。更に云はゞ助辭は其の語源を詞に發し、詞は其の起原を擬聲、嘆聲に發したるものなれば、其の根原にさかのぼりて論せば世に詞ありて助辭なく、擬聲、嘆聲ありて詞なきに至らむ。著者はわが口語を以つて屈曲語の域に入れる者となすものなり。故に舊文法家が助辭として說けるものもその名詞代名詞にそふと、その動詞形容詞にそふとを論せず、詞の下部の變化にして切り放ちうべからざるものは悉く之を語尾變化として之を說明せり。

著者謹す

日本俗語文典目次

總論 一

第一編 詞法論

第一章 詞の種類 六

第一項 名詞 六

普通名詞 八

固有名詞 九

第二項 代名詞 九

話說代名詞 一〇

話說定代名詞 一一

自稱 一三

對稱 一三

外稱 一三

近稱 一四

中稱 一五

遠稱 一五

話說不定代名詞 一六

話說疑問代名詞　一六
非話說代名詞　一八
第三項　動詞　二〇
主動詞　二三
助動詞　二三
第四項　形狀詞　二五
第五項　後置詞　三〇
第六項　接用詞　三四
第七項　接續詞　三六
第八項　問投詞　四〇
詞の精密なる分類　四二

第二章　詞の偶有的職任　四五

語尾變化　四六
助辭　四八
助用詞　五三
詞の熟合　五四
文法的關係　五五
第一項　體詞の偶有的職任　五五
體詞の助辭　五六
體詞の語尾變化　六四
體詞の待遇　六七
自家待遇　六八
自家尊遇　六八
自家卑遇　七一
自家不定遇　七二
所有待遇　七二
所有尊遇　七三
所有卑遇　七五
所有不定遇　七五
關係待遇　七五
關係尊遇　七六
關係卑遇　七七
關係不定遇　七七
對者待遇　七七
對者尊遇　七八
對者卑遇　七九
對者不定遇　八〇
體詞の數　八五
單數　八五
複數　八六
不定數　八八

體詞の量　八八
單量　八九
複量　八九
不定量　九〇
體詞の格　九一
主格　九三
處格　九五
受格　九六
比格　九六
聲格　九七
與格　九七
發格　九八
着格　九九
領格　九九
志格　一〇〇
係格　一〇一
同格　一〇二
重格　一〇三
呼格　一〇三
格の分類　一〇六
體詞の制限

體詞の嘆否　一一三
體詞の造語　一一五
造動詞　一一五
造形狀詞　一一九
造體詞　一二三
第二項　用詞の偶有的職任　一二七
用詞の語尾變化　一三〇
動詞活　一四〇
四段活　一四一
一段活　一四四
加佐行變格活　一四五
雜活　一四六
形狀詞活　一四八
久活　一四九
爾奈活　一五〇
能活　一五一
雜活　一五一
用詞の助辭　一五三
用詞の使役　一六一
原動　一六一
使動　一六二

被動 一六三
用詞の能 一六四
實事 一六四
可能 一六四
用詞の待遇 一六六
主體待遇 一六七
主體尊遇 一六七
主體卑遇 一六八
主體不定遇 一六九
關係待遇 一六九
關係尊遇 一七〇
關係卑遇 一七一
關係不定遇 一七一
對者待遇 一七一
對者尊遇 一七二
對者卑遇 一七三
對者不定遇 一七三
用詞の定 一七六
肯定 一七六
否定 一七六
用詞の時 一七八

話說時 一七八
現在 一七九
過去 一七九
未來 一八〇
不定時 一八一
事情時 一八二
現然 一八三
既然 一八三
將然 一八四
用詞の知度 一八八
確定法 一八八
想像法 一八九
用詞の說 一九〇
自說 一九一
他說 一九一
用詞の格 一九三
終止格 一九四
連體格 一九四
連接格 一九五
副格 一九五
接續格 一九六

合一接續格 一九七
推及接續格 一九八
分離接續格 二〇〇
假言接續格 二〇一
實言接續格 二〇二
重格 二〇四
合一重格 二〇五
分離重格 二〇五
用詞の意 二〇六
說明 二〇七
說明決言 二〇七
說明疑言 二〇七
命令 二〇七
命令決言 二〇八
命令疑言 二〇九
用詞の制限 二〇九
用詞の嘆否 二一〇
用詞の造語 二一一
全變造語 二一一
屈折造語 二一二
屈折造體詞 二一三

屈折造形狀詞 二一八
屈折造動詞 二二一
第三項 後置詞の偶有的職任 二二四
後置詞の語尾變化 二二四
後置詞の助辭 二二六
後置詞の待遇 二二七
對者尊遇 二二八
對者卑遇 二二九
對者不定遇 二二九
後置詞の格 二三〇
連用格 二三〇
連體格 二三一
後置詞の制限 二三一
後置詞の嘆否 二三二
第四項 接用詞の偶有的職任 二三三
接用詞の助辭 二三三
接用詞の制限 二三四
接用詞の嘆否 二三五

第二編　句法論

第一章　成分の種類　二三八
品詞　二三九
成語　二三九
成句　二三九
章句　二四〇
第一項　主辭　二四〇
本體主辭　二四一
屬性主辭　二四一
第二項　說辭　二四四
終止說辭　二四四
接續說辭　二四四
第三項　賓辭　二四四
本體賓辭　二四六
屬性賓辭　二四六
第四項　屬辭　二四六
第五項　連辭　二四八
第七項　句辭　二四九

第二章　成分の關係　二五〇
第一項　主辭の關係　二五一
主辭の結合　二五一
主辭の適合法　二五三
主辭の省畧法　二五四
主辭の配置　二五七
主辭の正置法　二五七
主辭の倒置法　二六〇
第二項　說辭の關係　二六一
說辭の結合　二六一
說辭の適合法　二六一
說辭の省略法　二六七
說辭の配置　二七〇
說辭の正置法　二七一
說辭の倒置法　二七一
第三項　賓辭の關係　二七五
賓辭の結合　二七五
賓辭の適合法　二七五
賓辭の省畧法　二八〇
賓辭の配置　二八三

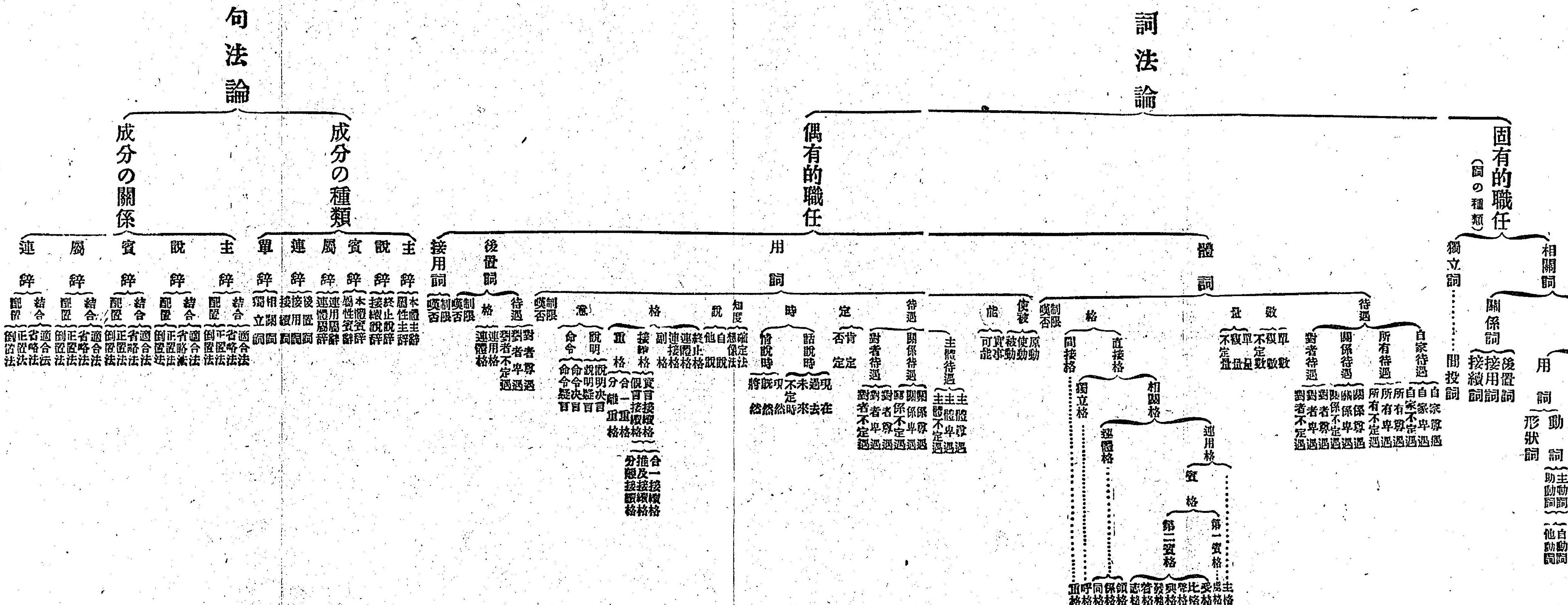
賓辭の正置法　二八三
賓辭の倒置法　二八九
第四項　屬辭の關係　二九〇
屬辭の結合　二九一
屬辭の適合法　二九一
屬辭の省略法　二九三
屬辭の配置　二九七
屬辭の正置法　二九七
屬辭の倒置法　三〇〇
第五項　連辭の關係　三〇三
連辭の結合　三〇三
連辭の適合法　三〇三
連辭の省略法　三〇五
連辭の配置　三〇六
連辭の正置法　三〇六
連辭の倒置法　三〇七

圖表

- 語法學
  - 詞法論
    - 詞の固有的職任
    - 詞の偶有的職任
  - 句法論
    - 章句の成分
    - 成分の關係

詞法論

- 固有的職任（詞の種類）
  - 獨立詞……間投詞
  - 相關詞
    - 關係詞
      - 接續詞
      - 後置詞
    - 主要詞
      - 體詞
        - 名詞
          - 普通名詞
          - 固有名詞
        - 代名詞
          - 話說代名詞
            - 話說定代名詞
              - 自稱
              - 對稱
              - 外稱
                - 近稱
                - 中稱
                - 遠稱
            - 話說不定代名詞
            - 話時疑問代名詞
          - 非話說代名詞
      - 用詞
        - 動詞
          - 自動詞
          - 他動詞
          - 主動詞
        - 形狀詞
- 偶有的職任
  - 體詞
    - 待遇
      - 自家待遇
        - 自家專遇
        - 自家不定遇
      - 所有待遇
        - 所有專遇
        - 所有不定遇
      - 關係待遇
        - 關係專遇
        - 關係專遇
        - 關係不定遇
      - 對者待遇
        - 對者專遇
        - 對者專遇
        - 對者不定遇
    - 數
      - 單數
      - 複數
      - 不定數
      - 單位
      - 複位
      - 不定位
    - 格
      - 直接格
        - 獨立格
        - 相關格
          - 主格
          - 第一賓格
          - 第二賓格
            - 與格
            - 比格
            - 受格
            - 指格
            - 志格
            - 領格
            - 同格
            - 呼格
          - 連用格
            - 連體格
            - 連用格
            - 連體主辭
            - 連用主辭
      - 間接格
    - 禁制否
      - 禁制
      - 否
    - 使役
      - 原動
      - 使動
      - 被動
      - 使役
    - 能
      - 實事
      - 可能
    - 待遇
      - 主體待遇
        - 主體專遇
        - 主體不定遇
      - 關係待遇
        - 關係專遇
        - 關係專遇
        - 關係不定遇
      - 對者待遇
        - 對者專遇
        - 對者專遇
        - 對者不定遇
    - 肯定
      - 現在
      - 過去
      - 未來
      - 不定
      - 話說時
      - 既往
      - 將來
      - 慣說時
      - 現在
      - 過去
      - 不定
    - 知度
      - 確定法
      - 想像法
      - 自說
      - 他說
      - 終止法
      - 連體格
      - 連接格
      - 副
    - 格
      - 直
      - 分離格
      - 合一直格
      - 接續格
        - 假言接續格
        - 更言接續格
        - 合一接續格
        - 推及接續格
        - 分離接續格
      - 說明
        - 說明決言
        - 說明疑言
      - 命令
        - 命令決言
        - 命令疑言
    - 禁制否
      - 禁制
      - 否
    - 待遇
      - 對者專遇
      - 對者不定遇
  - 用詞
    - 後置詞
      - 待遇
        - 對者專遇
        - 對者不定遇
      - 格
        - 連用格
        - 連體格
      - 禁制
      - 禁制
    - 接用詞
      - 禁制
      - 禁制



句法論
成分の關係
成分の種類
主辭
說辭
賓辭
屬辭
連辭
單辭
詞法論
偶有的職任
固有的職任
（詞の種類）
用詞
體詞
接用詞
後置詞
獨立詞
相關詞
關係詞
間投詞
接續詞
用詞
動詞
形狀詞

日本俗語文典

松下大三郎著

總論

思想を表はす聲音を言語といひ、一國の言語を國語といふ。日本語、支那語、英語など皆國語なり。

我が國語には文章に用ゐるものと談話に用ゐるものとあり。前者を文章語といひ、後者を口語又は俗語といふ。古くは文章語も口語も一樣なりしが、今を去ること六七百年前の頃より漸く言文に差を生ト遂に今日の態を成せり。

單に口語又は俗語といへば一樣の如くなれど、各地各社會多少方言的の差無きこと能はず。然れども東京の中流に行は

るゝものは最廣く通ト、他日我が標準語ともあるべきものなれば、之を以て我が口語を代表せしむること難からず。故に本書も主として東京の中流に行はるゝ語法を講ず。言語構成の形式的法則を語法又は文法といひ、其の書を「文典」といふ。「文典」の語はまた文法と同義にも用ゐらる。

語法に內容的法則と外形的法則との別あり。內容的法則とは思想上に存する法則にして未だ形に現れざるものなり。外形的法則とは聲音上の法則にして客觀に現れたるものなり。例へば名詞に「領格」といふ「格」あり、動詞に「過去」といふ「時」あるが如きは內容的法則にして、領格なるを示すに日本にて「ノ」「ガ」を附し、支那にて「之」を附し、英吉利にて「S」を附し、過去なるを示すに日本にて「ケリ」を附し、支那にて何をも附せず、英吉利にて「ed」を附するが如きは外形的法則なるが如し。

又語法に普關的法則と固有的法則との別あり。普關的法則とは如何なる系統の國語にも、苟も言語と稱せらるゝものには普關共通なる法則にして、名詞に格あり、時あり。其の內容的なる格、時等を或る方式に由りて客觀的に表白す。」といふ法則の如き即是なり。固有的法則とは格段なる國語の特に有する語法にして「領格を表はすに日本語にノ、ガを附し、支那語は「之」を附し英語はSを附す。」といふが如き、「漢英の名詞は發格着格を表はすこと無し。」などいふが如き法則即是なり。

言語の構成の形式的法則(即語法)を知る科學を語法學といふ。語法學は普關的語法學、固有的語法學の別あり。猶語法は普關的、固有的の別あるごとし。

日本口語々法學は一の固有語法學にして日本口語々法といふ一の固有的語法を研究するものなり。詳言すれば日本口語々法學は、日本の口語の客觀に表はしうる內容的法則と、之を表白する外形的法則とを研究するものなり。本書は日本口語々法學を記載す。

一貫せる思想を表はす聲音を說話といふ。說語は詞より成る。詞の一又は集合せるものが句といふ形式を成せる時、之を說話といふ。

詞とは觀念を表はす聲音にして言語の分つべからざる成分なり。「花」「鳥」「山」「川」「日影」「月代」「咲ク」「鳴ク」「高イ」「深イ」「最」「中々」「ケレドモ」「カラ」「其カラ」「又」「於テ」「付テ」「アヽ」「マア」などの如し。詞を數品に分ちて之を品詞といふ。詞はまた言、語、辭、言葉、言詞、語詞などいはる。

句とは詞の一貫せる思想を表はす形式なり。「花ガ咲ク」「鳥ガ鳴ク」「花早ク咲ケ」「ハイ」「イヽエ」などの如し。句は通常二個以上の詞より成るものなれども、稀には一詞より成ることあり。

言語の構成は、詞を、句といふ形式に充つるにあり。故に言語構成の法則即語法を二つに分ちて、詞各自の法則と、詞が句を成す上に於ける相互の關係上の法則との二つとす。前者を詞法といひ、之を論するものを詞法論と云ひ、後者を句法といひ、之を論するものを句法論といふ。詞法論と句法論とは共に語法學の二大部をなす。

第一編　詞法論

詞法論は語法學の一分科にして、詞各自に存ずる法則を論ずるものなり。

詞各自に存する法則に二つあり。一は詞の種類に關する法則にして、某種類に屬する詞は常に某職任を有すといふ法則なり。一は詞の場合を殊ゐするによりて生ずる法則にして、某の詞い某の場合に某の職任を有せといふ法則これなり。前者は之を詞の種類によりて論ず、後者は之を詞の偶然的職任によりて論ずるものとす。

第一章　詞の種類

詞は其の職任の上より之を分ちて、体詞、用詞、後置詞、接用詞、接續詞、間投詞の六種とし、更に体詞を其の職任の上より名詞、代名詞の二つに分ち、用詞を其の活用の上より動詞、形狀詞の二つに分ち、

名　詞
代名詞
動　詞
形狀詞
後置詞
接用詞
接續詞
間投詞

を八品詞と稱す。(助辭と稱するものい品詞の一にあらず。四九頁を見るべし)

此の八品詞ハ詞を直に八分したるものと思ふべからず。直ニ八分したるものとする時ハその分類は正當なる分類といふべからず。何となれば動詞、形狀詞のみは活用によりて分類し、他は皆職任によりて分類し、その「分類の標準」相同ドからざればなり。故に逐次數回分類して八品としたるものと解すべきなり。

第一項　名詞

名詞とは事物ゐ對する觀念を直接に表はす詞なり。事物の名稱の詞なり。山、川、花、月、思、心、悲、戰、年、月、白、黑、一、二、三、富士、立田、日清戰爭、前九年役、明治、大化などの如し。

名詞の中にハ他の品詞より變ドたるものあり。思、悲、樂、悟などれ如きハ動詞より來れるものにして白サ、青ミ、戀シサ、樂シサなどハ形狀詞より來れるものなり。二三個以上の詞の合して成れる名詞あり。「月見」「花見」「物思」「親思」「春雨」「秋風」「流レ水」「飛ビ火」などの如し。又「神サマ」「判官ドノ」「義經ラ」などの如く、サマ、ドノ、ラの如き、助辭と稱する聲音の添へるものあり。

名詞は之を種々ゟ分類することを得べし。然れどもその最必要なるは普通、固有の別なり。

普通名詞

普通名詞とは種類の名稱の、詞なり。人、國、山、川、年、戰、一、二、青、赤などの如し。普通名詞は種類の名稱の詞なるを以て同種類中の事物には普く通ず。例へば今これらの名詞が孰の人、孰の國、孰の山、川、年、戰、一、二、青、赤にも用ゐらるゝか如し。

固有名詞

固有名詞とは個々の事物の名稱の、詞なり。同種類中の他物と區別することを得る名稱の、詞なり。たとへば正成、日本、富

士、龍田、明治、西南戰爭などの如し。正成は或る一個の人を表はすのみにして他に通せず。日本は或る一個の國を表はすのみにして他に通せず。其の他、富士、龍田、明治、西南戰爭は或る格段なる山、川、年代、戰爭を表はすのみにして他の山、川、年代、戰爭には通せず。

第二項　代名詞

代名詞は事物を指示する詞なり。事物の形式を云ひて間接に其の事物を表はす詞なり。ワタシ、アナタ、アレ、ダレ、ダレカ、自分、他人、第一號、第二號などの如し。詳言すれば事物を表はすに、直接に其の事物の觀念を表はさずして、まづ一定の形式を設け、その表はさむとする事物が現にその設けたる形式中の如何なる形式に在るかを示し、以て間接に事物を表はすものなり。たとへばワタシ、アナタ、アレ等は講話者、聽話者、局外者といふ三つの形式によりて其の表はさむとする事物の現に其の三形式中の孰にあるかを示し、以て間接に其の事物を表はし、自分、他人等は行動者、非行動者といふ二つの形式によりて其の表はさむとする事物の、行動者なりや非行動者なりやを示し、第一號、第二號等は順序といふ形式によりて其の表はさむとする事物の現に如何なる順序にあるかを示し、以て間接にその事物を表はせるが如し。代名詞といふ名稱は名詞の代用をなすといふ義より生ずるものなり。されども代名詞は名詞の代用をなすにはあらで、唯間接に事物を指示するものなり。たとへばワタシといふは話す人の名の代にはあらで話す人を間接に指示するもの、アナタといふは聽く人の名の代にはあらで聽く人を間接に指示するものなるが如し。

代名詞を分ちて話説代名詞、非話説代名詞の二つとす。世に代名詞といふは主として話説代名詞を指すものにして非話説代名詞は甚曖昧に考へられたり。

話説代名詞

話説代名詞とは話説を標準として「話説の主体」(即講話者)「話説の客体」(即聽話者)「話説の局外者」といふ三形式を定め、其の表はさむとする事物の現に此の三形式中の孰に當るかを示し、以て間接に其の事物を表はす所の代名詞なり。ワタシ、アナタ、此奴、其奴、彼奴、此、其、彼、誰カ、何奴カ、孰カ、誰、何奴、孰などの如し。

話説代名詞を二分して話説説明代名詞、話説疑問代名詞の二つとし、話説説明代名詞を更に二分して話説定代名詞、話説不定代名詞とす。

話説定代名詞　話説定代名詞とはその指示する所を定めて指す所の話説代名詞なり。ワタシ、アナタ、コレ、ソレ、アレなどの如し。話説定代名詞は自稱、對稱、外稱の別あり。

自稱(或は第一人稱)の話説定代名詞とは話説の主体即話す人自らを指す代名詞にしてワタシ、ワタクシ、ワシ、オレ、拙者、などこれなり。この中ワタシ最普通なり。又手前、自分などは非説話代名詞なれどもワタシと同意義に用ゐらるゝことあり。ワタシ、ワシの語源は私にてもと公ならぬ一個人をさす名詞なり。オレは已にて同ジなどのオナと語根等し。

對稱(或は第二人稱)の話説定代名詞とは話説の客体即話を聽く人を指す代名詞にてアナタ、オマイ、キサマなどこれなり。アナタ最普通なれど目下のものにはオマイといふことも普通なり。アナタは彼ノ方にてもと次にいふ外稱なりしも

のなり。オマイは御前、キサマは貴様にてもと尊む意ありし
ものなるが今は却りて卑む意あり。
外稱〔或は第三人稱〕の話説定代名詞とは話説の局外者、即話
を話す人にも聽く人にもあらざる事物を指す代名詞にて
コイツ、ソイツ、アイツ、コレ、ソレ、アレなどの如きものなり。外
稱に三つあり、近稱、中稱、遠稱といふ。
近稱〔或は近主稱〕の代名詞とは話説の主体即話をする人に
近き外物を指す代名詞にて、人を指すに此奴、廣く事物を指
すにコレ、コイツ所を指すに此所、方位を指すにコッチ、コチ
ラなどあり。コイツは此奴より來り、コッチはコチより來り、
コチラはコチにラのうへるなり。此奴は卑む詞にて、卑むべ
からざる時には此ノ人、此ノ方などいふ。されどかくいふ時
は一詞にはあらで此ノに他の詞のうへるなり。又文章にて

此ノ、其ノかといふ此は代名詞なることあれど口語にてい
ふ此ノは形狀詞にて代名詞にあらず。コノといふコは靜止
的觀念を表はさずしてたゞコノといふ活動的觀念をあら
はせはなり。隨つてコノ、アノ、ドノ等も代名詞にあらず。
中稱〔或は近客稱〕の代名詞とは話説の客体即話を聽く人に
近き外物を指す代名詞にて人を指すに其奴、廣く事物を指
すにソレ、ソイツ所を指すに其所、方位を指すにソッチ、ソチ
ラなどあり。中稱とは近くも遠くもあらざるものを指すを
いふ意よりして附したる名なれど當らず。中稱は遠近の中
に位するものを指すにはあらで聽話者に近き事物をさす
ものなり。されは近客稱といふを當れりとす。
遠稱の代名詞とい話説の主体(話す人)にも客体(聽く人)にも
孰へも遠き事物をさす代名詞にて、人を指すに彼奴、奴、廣く

事物を指すにアレ、アイツ、所を指すに彼所、アソコ、方位を指すにアッチ、アチラなどあり。

話説不定代名詞　話説不定代名詞とは其の表はさむとする事物の形式(自稱なりや。又對稱、外稱なりや。)を定めずして指す代名詞なり。人をさすに誰カ、孰奴カ、廣く事物を指すに孰カ、ドイツカ、所を指すに孰所カ、ドッカ、方位を指すにドッチカ、ドチラカなどあり。「誰カ」ニ逢ッタ、「孰カ」ガ欲シイなどいふもその逢ひたる人、欲しきものは不定なり。

話説定代名詞と話説不定代名詞とをあはせて話説々明代名詞といふ。話説々明代名詞は次にいふ所の話説疑問代名詞に對するものにして、事物を説明的にあらはす話説代名詞なり。

話説疑問代名詞　話説疑問代名詞とは事物を疑問的に表はす話説代名詞なり。疑問すべき事物を表はす話説代名詞なり。答を要する話説代名詞なり。人を指すに誰、孰奴、廣く事物を指すに孰、ドイツ、所を指すに孰所、方位を指すにドッチ、ドチラなどあり。

話説不定代名詞にも、此の話説疑問代名詞にもといふ助辭をそへて作るもの多し。たとへば誰、孰奴、孰、孰所ドッチ、ドチラにモをそへて「ダレカ」「ドイツカ」「ドレカ」「ドコカ」「ドッチカ」「ドチラカ」などいふが如し。

幾個、何年、幾度等の如きものを疑問話説代名詞に算する文法學者多けれど非なり。これらの事物の形式を疑問して間接に事物を疑問する詞にはあらで、直接に事物の觀念(たとへは數、年、度等)を疑問するものなれば代名詞ゐはあらで名詞なり。疑問名詞といふべきものなり。

非話說代名詞

非話說代名詞とは、話說を標準とせず、話說ならざるものを以て標準として形式を設け其の形式によりて間接に事物を表はす所の代名詞なり。換言すれば話說代名詞ならざる代名詞なり。「自分」「他人」「第一號」「第二號」「何號ヵ」「何號」「今年」「去年」「何時ヵ」「何時」「一月」「二月」「何月ヵ」「何月」などの如し。

「自分」「他人」などは、行動を標準として行動者(行動の主体)非行動者の二形式を設け、之によりて事物をあらはす代名詞なり。自分と行動者をあらはし他人は非行動者を表はす。なほ自身、手前などは自分と同義に用ゐらる。自分、自身、手前(文章にては己)などは行動者をあらはす代名詞にて私、オレ(我)などは話說者を表はすものなり。これまて自分、己などゝ私、我などとの別を知るべし。

第一號第二號以下は順序を標準として其の形式によりて事物をあらはす代名詞なり。なほうのほか多かるべし。

非話說代名詞にも定、不定疑問の別あるまと例によりて明なるべし。即自分、他人、第一號、今年、一月などは非話說定代名詞、「何號ヵ」「何時ヵ」「何月ヵ」などは非話說不定代名詞、何號、何時何月などは非話說疑問代名詞なり。

名詞まもまゐ定、不定、疑問の別あるまと推して知るべし。花鳥、數などの如きは定名詞「何ヵ」「幾ッヵ」「若干」などは不定名詞、何、幾ッなどは疑問名詞なるが如し。

名詞と代名詞との別は從來甚曖昧に考へられたり。されどうの區別も、名詞は直接に事物の觀念を(說明的に或は疑問的に)表はし、代名詞は一定の形式まよりて間接まに事物の觀念を(說明的に或ゝ疑問的に)あらはすといふにあるのみ。よ

く辨ふべきなり。

体詞　名詞と代名詞とを合せて体詞といふ。体詞は事物の觀念を靜止的にあらはす詞なり。從來語尾の活用なき詞を体言ともいひたり。混すべからず。

第二項　動詞

動詞及形狀詞を說くに先ちてまづ用詞を說かざるべからず。動詞、形狀詞といふ詞は用詞をその活用外形の上より二分して名づけたる名稱にして詞の職任の上より名づけたるものにあらざればなり。

用詞とは体詞に對するものにして觀念を活動的に表はす詞なり、たとへは思フ、言フ、泣ク、笑フ、長イ、短イ、暑イ、寒イ、靜ナ、幽ナ、靜ニ、幽ニ、再、嘗テなどの如し。皆觀念を体詞の如く靜止的には表はさで活動的に表はせり。從來動詞形容詞、副詞などいへるものは皆用詞なり。

從來用言といふ詞ハ動詞、形容詞を合せていふにも、又活用ある詞をいふにも用ゐたり。用詞と混すべからず。

用詞は語法上の種々の意義を表はす爲に其の語尾の音を變化す。たとへば泣クといふ詞が泣カ、泣キ、泣ク、泣ケなどと變化し、靑イといふ詞が靑ク、靑イ、靑ケレなど變化するが如し。之を語尾變化又ハ活用といふ。

用詞は語尾變化の狀態の如何によを、之を分ちて動詞、形狀詞の二つとす。

動詞ハ語尾變化最自在なる用詞にして能く命令、受動、與動可能、尊敬等の意を表ししうるものなり。たとへは泣ク、笑ウなどは如し。泣ケ、笑ヘ(命令)、泣カレル、笑ハレル(受動)、泣カセル、笑ハセル(與動)、泣カレル、笑ハレル(可能)、泣カナイ、笑ハナイ(否定)

などの如く言ひうべし。問ウ、答ヘル、行ク、歸ル、知ル、忘レル、散ル、咲ク、來ル、去ル、死ヌ、生キル、勝ツ、負ケルなどの如き皆動詞なり。

動詞は多くはものゝ動作を表はす詞なり。前例の如き皆然り。されどもまた稀には有ル、御座イマスなどの如く唯存在をあらはすものあり。

從來動詞を定義して動作を表はす詞なりといへるは誤にて動詞必しも動作をあらはさず。動詞とは活用上の名稱のみ。本質に附したる名稱にあらず。

動詞の中には思ウ、忘レル、行ク、歸ルなどの如く本來の動詞あり。勉强スル、盡力スル、通ガル、學者ブルなどの如く体詞に助辭のうひてなれるものあり。嬉シガル、悲シガルなどの如く形狀詞に助辭のそひてなれるものあり。死ニ絶エル行キ過ギルなどの如く二動詞の合して成れるものあり。行キカシタ、ヤリマセンなどの如く動詞ュ助辭のそへるあり。その他なほ多し。

動詞を分ちて主動詞、助動詞のふたつとすること左のごとし。

主動詞

主動詞とは自ら主となりて專事實を表はす動詞なり。花ガ咲ク、紅葉ガ散ル、月ガ出ル、風ガ吹クの咲ク、散ル、出ル、吹クなどの如し。

助動詞

助動詞とは自ら一の事實をあらはすのみならず兼ねて他の動詞を主として之か意義を助くる所の動詞なり。行ッテ井ル、見テオク、捨テテアル、教ヘテヤルの井ル、オク、アル、ヤル

などの如し、皆一の事實を表はすと共に上の動詞の意義をたすく。このほか、善ウ御坐ンス、勉强シテイラッシャル、教ヘテアゲル、教ヘテッカハス、教ヘテモラウ、教ヘテ戴ク、教ヘテ願ヒマス、教ヘテ見ルの御坐ンス、イラッシャル、アゲル、ツカハスモラウ、戴ク、願ウ、見ルなどの如きもの皆助動詞なり。助動詞は他を助くる動詞なり。されど他を助けずして獨立するもとあり。例へば人ガ井ル、机ヲオク、本ガアル、物ヲヤルのヰルオク、アル、ヤルなどの如し。此の如き場合には助動詞にはあらで主動詞なり。凡て他を助くる場合にのみ助動詞にして他を助けずして獨立する場合には主動詞たるものなることを忘るべからず。

助動詞は英語にいはゆる Auxiliary verb (Can, may, will 等の如きもの) にして他を助くる所の一の動詞なり。さるを從來の文法學者は之を誤解して、動詞を助くる詞となし、ケリ、タリ、ラル、サスなどのごとき助辭を助動詞とせり。はなはだしき誤といふべし。

第四項　形狀詞

形狀詞は用詞の一部にして、動詞に比すれば語尾變化やゝ少くして、命令、受動、與動、可能、否定等の意を表はさゞるものなり。たとへば青イ、赤イ、遠イ、近イ、長イ、短イ、靜ニ、幽ニ、遙ニ、僅ニ、早速、斷然、其ノ、此ノ、彼ノ、孰ノなどの如し。皆命令、受動等の意を表はすことなし。

形狀詞は事物の形狀(摸樣、程度、分量、順序、源因、指示等)をいひあらはすものなり。たとへば

夜が此の頃は長イ。　(夜の摸樣を示す)

靜ニ花を見よう　(見ヨウの摸樣を示す)

此の頃は余程夜が長い　（長イの程度を示す）
隨分ひどい事をする　（ヒドイの程度を示す）
一人ノ人がきた　（人の分量を示す）
菫が澤山咲いてゐる　（咲イテヰルの分量を示す）
之を先ニ、爲て、彼を後ニ、爲る　（爲テ、爲ルの順序を示す）
春花をみて秋紅葉をみる　（ミテ、ミルの順序を示す）
ナゼそれをいはない　（イハナイの源因を示す）
何、そんな事があるものか　（アルの源因を示す）
其ノ人は知らない　（人の指示を示す）
彼ノ人は誰だらう　（人の指示を示す）

の長イ、靜ニ、余程、隨分、一人ノ、澤山、先ニ、後ニ、春、秋、ナゼ、何、其ノ彼ノなどの如し。

形狀詞のうちには長イ、短イ、遠イ、近イなどの如く本來形狀詞なるものゝほかに靜ナ、幽ナ、其ノ、此ノなどの如く他の詞より轉して形狀詞とされるものの多し

從來の文法書は形狀詞といふ名目を立てゝして、副詞、形容詞の二つとして說けり。曰はく副詞は動詞形容詞又ハ他の副詞の前にありて其の意氣を制限する詞にして、繪ヲ善ク書ク、月イト清シ、甚普ク書ケリの善ク、イト、甚かどの如きものなり。形容詞とは事物の形容を表ハす詞にして、月清シ、花美シの清シ、美シなどの如きものなりと。又いふ、副詞は体言（語尾變化なき詞）にして形容詞は用言（語尾變化ある詞なり）と。而して美ナル花、或ル人、其ノ時の美ナル、或ル、其ノなどの如きものを、或る學者ハ形容詞とし、或る學者ハ形容詞とせず。

然れども此等の考みな誤謬のみ。副詞形容詞は形式上の名

にして本質の名にあらず。副詞とも形狀詞ゐ用詞(動詞又は形狀詞)に係る場合の名稱なり。(英文典などにいふ形容詞は形狀詞が体詞(名詞代名詞)に係る場合の名稱なり。)さるを全く異なる詞の如く思ふハ誤なり。又副詞は語尾變化なき詞なりと思ふも非なり。たとへば、早卒ニ、美麗ニといふ副詞は早卒ノ、美麗ノ(口語にては早卒ナ、美麗ナ)ト變化するにあらずや。(かゝる場合のニ、ノはもとは助辭なれど早卒、美麗などにそひ之を語体とし、語尾となれるなり。此の時の早卒、美麗などは名詞にはあらぜ、形狀詞の語体なり。そハ上にイト、甚などの如きいはゆる副詞を置かるゝにても明なり。)副詞の中にハイト、頗などの如き、變化のやゝ難きものなきにあらねどそは唯外形のものみ。たとへ變化は有りとも無くとも、その詞の本質

たに等しからぜ一品詞の中に算ふべし。變化の有無により て分類し本質までも異なるものゝやうに思ふハいみなき誤なり。かゝる誤に陷れば、こゝろ、或ル人などの或ルの如く、説明に艱難なる詞も出でくるなれ。かくては口語の其ンナ、此ンナなどハ如何ゝか説くべき。

されば語尾變化の有無ゐかゝはらず、觀念を活動的に表ハす詞をは用詞とし、之を語尾變化の如何によりて動詞、形容詞の二つに分つべきなり。かくて從來説明に苦みし或ルの如きは容易ゝ形狀詞たるをを知りうべく、又口語の其ノ、其ンナ、此ノ、此ンナなども形狀詞たるを知りうべし。(文章の其ノ、此ノ、彼ノは、或は代名詞の主格領格たり、或は形狀詞ハ連體格たるものなり。口語ゐてハ必形狀詞の連體格なり。)

動詞と形狀詞とハたゞ外形上より命名したるものにして

本質の區別にあらず。その外形の如何に異なるかの詳論は後章用詞の語尾變化の條にもづる。

第五項　後置詞

後置詞とは体詞(名詞、代名詞)を他の詞に關係せしむる詞かり。たとへば

其の事に就イテ談が有る
其に就イテノ談
私に取ッテ恩人です
私に取ッテノ恩人
風が吹くに由ッテ花が散る(風ガ吹クは名詞の資格なり)
彼の人にシテは大出來だ

の就イテ、就イテノ、取ッテ、取ッテノ、由ッテ、シテなどのごとし。就イテは事を有ルに關係せしめ、就イテノは其を談に關係せしめ、取ッテは私を恩人に關係せしめ、取ッテノは私を恩人デスに關係せしめ、由ッテは「風ガ吹ク」を一名詞よみなして之を散ルに關係せしめ、シテは人を大出來だに關係あらしむ。

口語には後置詞の數甚少なし。文章にはやゝ多し。

人を使テ日中市せしむ
此所にシテ家やもいづく
山里に於イテ月を見る
都を霞と共ニ立つ
かれこゝを以テ
かむろぎ、かむろみの尊以チテ
之を學者と爲テ見る

の使テ、シテ於イテ、共ニ、以テ、以チテ、爲テなど、そのほかなは

多し

從來の文典にも此の後置詞を說けるものゝ如し。さるは於イテ、以ッテなどいふ詞の思ひ出でられざりしかるべし。ガ、ノニ、ヲなどの如くものを後置詞としてあげたる文典あれどもそは後置詞といふ語が偶然一致したるまでにて我がいふ後置詞にあらぬ。

後置詞はたゞ詞と詞との關係を表はすのみにして動作形狀等を表はすものにあらず、たゞ關係觀念を表ハすのみにして主要觀念を表ハすものにあらざれば、之を動詞の一とすると能はぬ、又已自ら一觀念(一關係觀念)を表はすを以て之を助辭の一とすると能はぬ。必後置詞といふ一名目をたてざるべからず

我が國語に於ては後置詞は体詞の後にれかるゝを以て之を後置詞といへども他れ多くの國語に於いてハ体詞の前にれかるゝを以て前置詞といはざるべからぬ。たとへば英語にて

With patience you may succeed,

Lovers around her are sithing,

The poor bird took refuge in a hole in the oak,

の with, around, in の patience, her, a hole, the oak の前にれかるゝの如し。されば之を preposition (前置詞) と云ひて postposition (後置詞) といはず。又漢文にて

於是信就視之俛出袴下蒲伏。

信數與蕭何語。

子謂冉有曰女弗能救。

爲人謀而不忠乎。

天賢者以感忿睚眦之意而親信窮僻之人。

などいふ於、與、謂、爲、以なども前置詞なり。

後置詞ハ通例、体詞(名詞、代名詞)を用詞(動詞形狀詞)に連ぬるものなれども之にノといふ助辞を附するときは体詞を他の体詞ニ連ぬる後置詞となる。たとへば前例の其ニ就イテノ談、私ニ取ッテノ恩人の就イテノ、取ッテノなどの如し。文章にては此の法盛に行はるれど口語にはいと稀なり。

第六項　接用詞

接用詞は用詞を他の詞(他の用詞)に接續せしむる詞なり。事實と事實との關係を表ハす詞なり。たとへば

春ぞ來たカラ花が咲いた。

春は來たケレドモ花はまだ咲かない。

のカラ、ケレドモなどの如し。カラは來タといふ用詞を他の用詞咲イタに接續せしめ、ケレドモは來タを咲カナイに接續せしめたり。

接用詞のおもなるものは

から、からには、もの、といふと、

けれど、けれども、けれどもが、ものゝ

などなり。今その用例の表を示さむ。

あめがふる	カ
	カラ
	ニハ
	モ
	ノ
	トイフト
路が悪くなる。	
空は晴れた	ケレド
	ケレドモ
	ケレドモガ
まだ路は悪い。	

（モノ　ノ）

カラニハはカラニ、といひ、トイフトはテート、モノヽはモンノともいはる。モノといふ接用詞ハ多小嘆ずる意を有するものにして、其の筈なりといふ如き意味を有する所に用ゐらる「雨がふるモノ、路が悪い筈さ」などの如し。モノは物ハて文章のものをより來れるなり。

第七項　接續詞

接續詞ハ二個以上の言葉を同資格に接續する詞なり。たとへは

春は花も咲くし。ソウシテ。鳥も鳴く。
梅は二月に咲いて、櫻ハ三月に。ソウシテ。卯の花は四月に。ソウシテ。菖蒲ハ五月に咲く。
花は咲いた。シカシ。間もなく散つた。

のソウシテ、シカシなどの如し。始のソウシテは咲クシと鳴クとを同資格に接續し、次のソウシテは三月ニと四月ニと五月ニとを同資格に接續す。シカシは咲イタと散ッタとを同資格に接續す。

接續詞のれもなるものは

そうして、それから、また、だから、ですから、しかし、しかしながら、だけれど、だけれども、ですけれど、ですけれども、けれど、けれども、けれどもが

などなり。今その用例の表をかゝぐ

ソウシテ
ソレカラ　箱根、足柄だのなど
マタ　富士だの足鹿だの

春は暮れた。（ソウシテ／ソレカラ）夏がきた。

私は友だちが懐しい。（ダカラ／デスカラ）忘れる時はない。

（シカシ／シカシナガラ／ダケレド／ダケレドモ／デスケレド／デスケレドモ／ケレド／ケレドモ／ケレドモガ）花はまだ咲かない。

ケレド、ケレドモ、ケレドモガは或は接用詞たり或ハ接續詞たるものなり。「春も來たけれど花もまだ咲かない」の如く上の言葉か下の言葉ヨ附屬するやうに接續する時は接用詞にして「春は來た。」「けれども花はまた咲かない」の如く上の言葉と下の言葉とを同資格ヨ接續せしむる時は接續詞なり。よく注意してこの別を誤るべからず。

英文典などにて Conjunction（接續詞）といふは我が接續詞と接用詞とを合せいふものなり。英文典などにても通常我が接續詞をハ Co-ordinat Conjunction（同格接續詞）といひ、接用詞をば Subordinat conjunction（附屬接續詞）といふ。

主要詞及關係詞、体詞と用詞とハ思想中の主要觀念を表はす詞なるを以て之を主要詞といふ。後置詞は体詞を他の詞に關係せしめ、接用詞は用詞を他の詞に關係せしめ、接

續詞は体詞用詞にかぎらず凡て言葉を同資格に相關係せしめ、此の三つはいづれも思想中の關係觀念を表はすものなれば之を關係詞といふ。(後置詞は接用詞の例ならひて接体詞といふも可なるべし。)

第八項　間投詞

間投詞ハ他の詞と更に文法的關係を有すべからざる獨立絶對の詞なり。ハイ、エイ、イヽエ、ナアニ、オヤ、アヽ、ヤア、ヤア、ヤイ、ナア、ヤイ、オイなどの如し。

間投詞中感嘆をあらはすものを感嘆詞といふ。前例のオヤアヽ以下の如きは感嘆詞なり。

英語などにては yes (肯定的に) no (否定的に) などハ副詞あれど我が國のハイ、イヽエなどは副詞にあらずして感嘆詞なり。混すべからず。

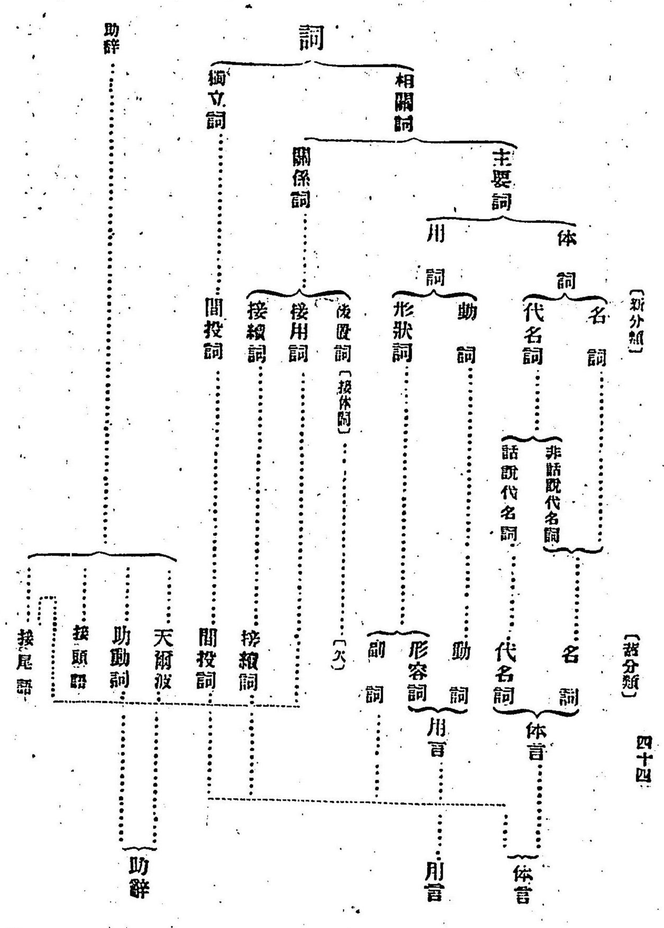
又知ラナイヨ、御出ナサイナノヨ、ナなどを感嘆詞として一の品詞の如く論ずるものあれども、これらハ感嘆をあらはす助辭にて詞(觀念を表はす聲音)にあらず。混同すべからず。

獨立詞及相關詞　　間投詞ハ一詞にして一句をなす獨立絶對の詞にして、他の詞と何等の文法的關係を有するとあし。たとへばハイ。イ畏マリマシタ、イヽエ知リマセンなどのハイ、イヽエが一詞にして一句をなし、よく一思想を表はし畏マリマシタ、知リマセンに對して文法上の形式を以て相關係する所なきが如し。故に間投詞を獨立詞といふ。又名詞、代名詞、動詞、形狀詞、後置詞、接用詞、接續詞の七つは相關係して、一句をなし一思想を表はすものなるを以て、獨立詞に對して相關詞といふ。例へば、山櫻、庭櫻其カラ八重櫻ガ見事ニ咲イタカラ君ト共ニ見ヨウなどの如く山櫻、庭櫻(名詞)其カ

ラ(接續詞)八重櫻ガ(名詞)見事ニ(形狀詞)咲イタ(動詞)カラ(接用詞)君ト(代名詞)共ニ(後置詞)見ヨウ(動詞)が相關係して、一句をなし一思想を表はすが如し。獨立詞は思想を分拆せずして其のまゝ之を表はし、相關詞も思想を分拆して其の各部を分擔し相關係して之を表はす。故に獨立詞の表はす所は單純不明瞭にして、相關詞の表はす所は緻密明瞭なり。但し相關詞といへども日ダッ、時雨レルなどの如く一詞一句をなしうるものあれども日ダッカラ、時雨レル頃などの如く他詞と相關係しうるものなれは尙相關詞たるを失はず。

詞の精密なる分類　詞を名詞、代名詞、動詞、形狀詞、後置詞、接用詞、接續詞、間投詞の八品に分つゝ便宜上の分類のみ。精細なる分類に於ては詞をうの、他と文法的關係を有すや否やによりて相關詞、獨立詞の二つゝ分ち、相關詞をその主要觀念を表はすや關係觀念を表はすやによりて主要詞關係詞の二つに分ち、更に主要詞を、主要觀念を靜止的に表はすや活動的に表はすやによりて、體詞、用詞の二つとし、關係詞を、體詞と或る詞と或る詞との結合上の關係觀念を表はすや、用詞と或る詞との結合上の關係觀念を表はすや、單ゝ詞と詞とのと接續上の關係觀念を表はすやよりて、後置詞(接體詞)、接用詞、接續詞の三つとす。體詞も、直接ゝ事物の觀念を表はすか、形式を指示して間接に之を表はすか、その觀念表白の方法の如何によりて之を名詞、代名詞の二つとし、用詞はその語尾變化の如何によりて動詞、形狀詞の二つとす、用詞の分類のみ詞の外形により、他ゝ悉く詞の職任による。

今左に詞の分類の表を掲げ、八品詞の概念の系統を示し、並に余が品詞の範圍と從來の品詞の範圍とを對比す。



第二章　詞の偶有的職任

詞の偶有的職任とは詞の、使用上の場合によりてことなる職任あり。たとへば花といふ詞は其の「種類」の上よりいへば思想中の主要觀念を靜止的に表はすといふ職任を有すれども、其の說話中に用ゐらるゝ「場合」の上よりいふ時は花散ルといふ場合には作用の主体を表はすといふ職任を有し風花ヲ散ラスといふ場合には作用の客体を表はすといふ職任を有するが如し。此の如く場合によりて異なる職任は偶有的職任なり。本章は詞の偶有的職任の法則を講ず。詞の如何なる偶有的職任を有するかを示すに、我が國語にありては主として語尾變化と助辭との二方法による。又助用詞、詞の熟合、別語、文法的關係等によることあり。

語尾變化

語尾變化とは詞の下部に於ける、音の變化なり。たとへば住ムといふ詞が

住ま　住み　住む　住め　住みーやあ

など變化し、更にまた

住まう　住まん　住んだ　住みーやあがる　住むんだ

などの如く變化し、寒ィといふ詞が

寒く　寒かあ　寒う　寒い　寒けれ　寒けりーやあ

など變化し、さらに

寒からう　寒かつた　寒がる　寒いんだ

または

寒さ　寒さう　寒げ

など變化するが如し。

此の如く種々に變化し、以てその如何なる偶有的職任を有する場合なるかを示すなり。

詞ハ語尾變化上、その變化する部分を語尾といひ、その變化せざる部分を語体（又は語根）といふ。たとへば前例のマ、ミ、ム、メ、ミーヤ、ア、マウ、ンダ、ミーヤアガル、ムンダなどの如きハ語尾として住、寒などは語体なるが如し。

語尾變化に文法的語尾變化と非文法的語尾變化との別あり。

文法的語尾變化とハ詞の文法上の偶有的職任を示す語尾變化なり。たとへば住ム、住メなどの變化の如し。住ムと變化する時は説明の職任あるを示し、住メと變化する時は命令の職任あるをしめす。

非文法的語尾變化とは詞の文法的職任を示さゞる語尾變

化なり。たとへば住ムの住ムンダと變化し、寒イの寒ガルとなれるものにして、此の變化は更に文法上の偶有的職任を表はすことなし。

助辭

助辭とは詞に密着して其の詞の職任を助くる聲音なり。たとへば、

春ガ來れば花も咲くし鳥も鳴くでは無いか

のガ、バ、モ、シ、デ、ハ、カなどの如し。ガは春に密着して其の來るといふ作用の主体を表はす場合なるを示し、バは來レに密着して其の咲ク、鳴クと約結する場合なるを示し、モは花及鳥に密着して其の事情の互に相類似せるものを表はす場合なるを示し、シは咲クに密着して其の鳴クと接續する場合なるを示し、デは鳴クに密着して其の異なる用詞となる場合にあるを示し、ハは鳴クデに密着して其の特に取り出てゝいはるゝ場合なるを示し、カは無イに密着して、その疑問の意を表はす場合なるを示せり。

助辭は廣義にいふ言葉の一なれども、文典にていふ「詞」にはあらず。詞は自ら觀念をあらはす所の聲音なり（第四頁九行目參考）。然るに助辭ハ詞に副ひて詞と共に觀念を表ハすのみにして己みづからは觀念を表はすこと能はず。たとへば前例のガ、バ、モ、シ、デ、ハ、カなどの、春、來レ、花、咲ク、鳥、鳴ク、無イといふ詞にそひて始めて其のみづからが副へる詞と共に觀念を表ハせども、詞にうはずして更に觀念を表はすことなきが如し。助辭の、詞にそふ時ハその助辭と詞とを合せて一詞とみるべきものなり。たとへば

春が　來れば　花も　咲くし　鳥も　鳴くでは
無いか

などの如く、―を附したるものを一詞とするが如し。

詞に助辞の副へる時、助辞に對してその副はれたる詞を本詞といふ。たとへば前例の春、來レ、花、咲ク、鳥、鳴ク、無イなどのうの助辞ガ、ハ、モ、シ、デ、ハ、カに對して本詞なるが如し。

助辞は詞の一にもあらで、詞の職任を助くる方法に用ゐらるゝ聲音にして、語尾の如きものなり。助辞が本詞に對する關係は語尾が語体に對する關係の如し。されは語尾變化といふに對して、詞に種々の助辞のそふを助辞變化といふも可なるべし。

されど助辞と語尾とは大に異なるものあり。助辞は詞に副ふ者にして、其の既にそへる詞より助辞を除くも本詞は依然として詞なれども、語尾は詞の部分にして、詞といふ全体より之を除くべからず。強ひて之を除くときは殘れる部分は一の詞にはあらで詞の上部たるのみ。隨ひて無意義の聲音たらざるを得ず。

助辞と語尾との別は誤りやすきもの少なからず。住マウ（スモー）、住ンダ、住ミーヤアガル、住ムンダのウ、ダ、ヤアガル、ダの如きは助辞の如く見ゆれども之を除くときい殘れる部分も無意義となるを以て、これらが一の助辞なるにはあらで「マウ（モー）」「ンダ」「ミーヤアガル」「ムンダ」といふ語尾なるが如し。よく助辞と語尾との概念を明にして之を辨別すべきなり。

語尾のうちにも助辞より來れるものすくなからず。たとへは見タ、見ヤアガル、住ムノダ、住メバのタ、ヤアガル、ノ、ダ、バの如きは素助辞なれど住ムといふ詞にそひて住ンダ、住ミーヤ

アガル、住ムンダ、住ミーヤアとなる時はうのもと同トくしてその意義も同トけれども、既に助辞にはあらで「ンダ」「ミーヤア」ガル「ムンダ」「ミーヤア」といふ語尾なるがごとし。

助辞はその前附すべきものを頭辞といひ、後附すべきものを尾辞といふ。たとへばオ花、オ庭のオの如きは頭辞にして花ヲ見ル、庭ヲ作ルのヲの如きは尾辞なるが如し。

助辞にもまた語尾變化に文法的非文法的の別あるが如く文法的助辞、非文法的助辞の別あり。

文法的助辞は詞の文法上の偶有的職任を表はす助辞なり。たとへばノ、ヌなどのごとし。ノは体詞にうひて人ノ家、私ノ心などの如く事物の所有者を表はす偶有的職任あるを示し、タは動詞にそひて見ヌ、起キヌなどの如く作用の否定を表はす偶有的職任あるを示せり。

非文法的助辞ハ詞の偶有的職任を表はさゞる助辞なり。たとへば北山時雨デ、箱根ハ雪ダのデ、ダなどの如し。デ、ダは時雨、雪といふ体詞を屈折せしめて動詞となすものにして、偶有的職任を表はすことなし。

助用詞

文用詞は助用詞の助をうりてその偶有的職任を示すことあり。たとへば行ッタといふ用詞は過去の形式なるに、之に居ラウといふ助用詞を附して行ッテ居ラウとすれば未來より見たる過去を表はす形式となり、利巧ダといふ用詞ハ別に尊敬の意なきも入ラッシャルといふ助用詞を附して利巧デ入ラッシャルとすれば尊敬の意を表はす形式となるが如し。

助用詞にも文法的、非文法的の別あり。

文法的助用詞は用詞の文法上の偶有的職任を表ハすに用ゐらるゝものにして前例の居ラウ、入ラッシャルなどのおときこれなり。

非文的助用詞とハ文法上の偶有的職任を表はさゞる助用詞にして行ッテ見ル、見テ置ク、教ヘテ頂ク、助ケテ遣ルの見ル、置ク、頂ク、遣ルなどの如し。

詞の熟合

詞の熟合もまた偶有的職任を示すことあり。たとへば物の數の單數なるを表はす職任あるを示すに体詞に一といふ詞を熟合せしめて一詞一人などいひ複數なるを表はす職任あるを示すに數といふ詞を熟合せしめて數詞、數人などいひ、また同一の詞を熟合せしめて心々、人々などいふがごとし。

文法的關係

又甚稀には偶有的職任を示す分明なる記號なく、唯前後の關係によりて之を示すことあり。たとへば花ガ散ル、散ル花の散ルは孰も同形なれども前後の關係によりて、前の散ルは花を叙説する職任を有し後の散ルは花の意義を調ふる職任を有するを示すがごとし。

第一項　体詞の偶有的職任

体詞(名詞、代名詞)の偶有的職任には數、量、待遇、格制限、嘆否あり。この、中格最必要なり。

体詞の偶有的職任は主として助辭によりて之をあらはしまた語尾變化によりて之をあらはし、また稀には詞の熟合、別詞文法的關係による。

されば体詞の偶有的職任をとくに先ちてまづその主とし

で用ゐらるゝ所の、体詞の助辭をとき、次に体詞の語尾變化をとかざるべからず。

体詞の助辭

今左に体詞にそふ所の助辭の表をかゝぐ。

ら(等)　兵士ラ、　私ラ、

たち(達)　華族タチ、　私タチ、

ども(共)　盲人ドモ、　私ドモ、

がた(方)　華族ガタ、　彼方ガタ、

以上數をあらはすもの

など(等)　人ナド、　其ナド、

なぞ　人ナゾ、　其ナゾ、

なんぞ　人ナンゾ、　其ナンゾ、

なんか(何カ)　人ナンカ、　私ナンカ、

やなんか　人ヤナンカ、　私ナンカ、

ばかり(計)　人バカリ、　私バカリ、

はつかり　人ハツカリ、　私ハツカリ、

はつか　人ハツカ、　私ハツカ

以上量をあらはすもの

が　人が行く、　私が居ろ、

の　人ノ行く時、　私ノ居る所、

を　人ヲ思ふ、　私ヲ忘れる、

に　人ニいふ、　私ニ話す、

へ(え)　東京へ行く、　此所へ來る、

まで　國マデ行く、　此所マデ來る、

から　國カラ歸る、　此カラ行く、

と　善トなる、　私トした事が、

以上格をあらはすもの

お(御)　オ庭、　オ國、
ご(御)　ご家内、　ご將軍、
さま(樣)　神サマ、　御月サマ、
さん
どん(殿)
くん(君)
め　犬メ、　此奴メ。

以上待遇をあらはすもの

する(爲)　勉強スル、
ふる　學者ブル、
かる　通ガル、
だ　人ダ、

ちや　人チヤ
です　人デス
らしい　人ラシイ
でと　箱ゴトよこせ
に　馬鹿ニ早い
と　早ケト來る
より　人ヨリ多い
だけ　人ダケ多い
ほど　人ホド無い
くらゐ　人クラヰはある
ながら　女ナガラ男まさりで

以上係詞を用詞に變ずるもの

ぐるみ　箱グルミ

まど(色)　入口トにいふ
から……まで　三時カラ五時マデ
と　花ト月
や　花ヤ月
に　花ニ月
ま(小)　コ才子
か　何カ
やら　何ヤラ
め(目)　三度メ
たい(鯛)　鯛一

以上体詞を異なる体詞に穿するもの

は　人ハ　私ハ
も　人モ　私モ

さへ　春サヘ來れば、
さい　春サイ來れば、
すら　花スラ見ない、
ばかり　花バカリ見る、
ばっか　花バッカ見る、
ばっかり　花バッカリ見る、
まで　花マデ見た、
こそ　花コソ見たが、
しか　花シカ見ない、
しきゃ　花シキヤ見ない、
か　幾つカ有る、
も　何モない、
やら　何ヤラ分らない、

以上制限をあらはすもの

ね	花カネ、	月カネ、
ぬい	花ガテイ、	月ガテイ、
な	花ガナ、	月ガナ、
なあ	花ハナア、	月ハナア、
さ	花ガサ、	月ガサ、
や	花子ヤ、	鳥子ヤ、
よ	花子ヨ、	鳥子ヨ、

以上感嘆をあらはすもの

以上の体詞にそふ助辭のれもなるものなり。

右のうち數をあらはすもの、量をあらはすもの、待遇をあらはすもの、格をあらはすもの、制限をあらはすもの、感嘆をあらはすもの〻五種は文法的助辭にして体詞を用詞に變ずるもの、体詞を異なる体詞〻變ずるもの〻二種は非文法的助辭なり。

文法的助辭中、數量、待遇をあらはすものゝ「体詞の、他の言葉との關係上以外の偶有的職任」をあらはす助辭にして之を横助辭といひ、その体詞にそふや他の文法的助辭よりも先〻附せらるゝを以て之を内助辭といふ。また文法的助辭中格、制限、感嘆をあらゝすものは「体詞の、他の詞との關係上の偶有的職任」をあらはすものにして之を縱助辭といひ、その体詞にそふや、他の文法的助辭より外部に附せらるゝを以て外助辭といふ。

バカリ、バッカなどの如くものが量をあらはす助辭と制限をあらはす助辭との何れへも屬するは、その体詞にそふて・あたりて格をあらはす助辭より先に附せらるゝことゝ後

に附せらるゝことゝあればなり。

体詞の語尾變化

我が國の体詞もと語尾變化あることなかりしが近世の口語は非常に多く語尾變化を有するに至れり。

通例語尾と稱せらるゝものは、いづれの國語にありても始は獨立の詞なりしものがやう〳〵その獨立を失ひて遂に助辭となり、更に本詞に密着して語尾となれるもの多し。我が國語にれける語尾變化は全く助辭の化して語尾となり種々に變化するものなり。

今左に体詞の語尾をあぐ

あ(ヲ)	花ヲ見る、	川ヲ渡る、	助辭のヲより來る。
い(ヲ)	飯ヲ食ふ、	火ヲ附ける、	類化上助辭のヲより來る。
よお(ヲ)	すみーヨオ(墨を)磨る、	かきーヨオ(柿を)食ふ、	助辭のヲより來る。
う(ヲ)	湯ヲ飲む、	巣ヲ作る、	助辭のヲより來る。
おれ(ヲ)	さくーオオ(鑿を)する、	ろくーオオ(鑿を)食む、	助辭のヲより來る。
ゐ(ヲ)	酒ヲ飲む、	毛ヲ切る、	助辭のヲより來る。
よお(ヲ)	さけーヨオ(酒を)飲む、	いけーヨオ(池を)潮る、	助辭のヲより來る。
お(ヲ)	人お(ヒトーヲ)殺す、	戸オ(トーヲ)たてる、	助辭のヲより來る。
い(ニ)	國イ歸る、	東京イ行く、	助辭のニより來る。
って(ト)	東京ッテ言ふ所、	都ッテいふもの、	助辭のトより來る。

以上格をあらはすもの

あ(ハ)	山ア高い、	川ア水が流れる	助辭のハより來る。
やあ(ハ)	つきーヤア(月は)出た、	しみぢーヤア(紅葉は)きれいだ	助辭のハより來る。
ああ(ハ)	はるーアア(春は)來た、	たゝーアア(風は)上った	助辭のハより來る。
や(ハ)	過げヤ(過げは)しない、	出來ヤ(出來は)しない、	助辭のハより來る。
っきゃ	其ッキャ無い、	此ッキャ無い、	助辭のシキャより來る。

以上制限をあらはすもの

って え（トニフ） 東京ッテエ所。 人ッテエ物。 トニフより來る。

って（トニフ） 東京ッテ所。 人ッテ物。 トニフより來る。

ってな（トニフ樣ナ） 東京ッテナ所。 人ッテナ物。 トニフ樣ナより來る。

ってや（トニヘバ） 人ッテヤ。 鳥ッテヤ。 トニヘバより來る。

以上体詞を用詞に變するもの

以上は体詞の語尾變化なり。されどこゝにまた、体詞よそふ助辭の中に特殊の語尾變化を有するものあり。

ば（バ） 人チバ、 鳥をば、 助辭のバより來る。

以上助辭ナの語尾

んと（ド、ト） 人ナント云ふものは、 ド、トより來る。

んって（ド、ト） 人ナンッテ云ふものは、 ド、トより來る。

んってな（ド、ト云フ樣ナ） 人ホンッテナものは、 ド、ト云フ樣ナより來る。

んってば（ド、ト云フ） 人ナンッテエものは、 ド、ト云フより來る。

以上助辭ナドの語尾なり。此の場合にナドのドはンに變ずるなり。

我が口語の体詞は、此の如く語尾變化を有す。古語をのみ研究してその体詞に語尾變化なきを見て我が國語にも体詞に語尾變化なしなどれもふは早計の至なり。

世に体言とも語尾變化なき詞なりと說くものあれども口語は体詞に既に語尾變化ある以上は詞の体用の別はその外形なる語尾の靜動によるものにあらざすして全くその詞のあらはす意義の靜止的なると活動的なるとによるものなることを知るに足らむ。

体詞の待遇

体詞の待遇とは体詞の一偶有的職任にしてある事物に對

する講話者の、尊卑の念を表はすものなり。

待遇に尊遇、卑遇、不定遇の三つあり。

尊遇とは尊む意をあらはす職任をいひ、卑遇とは卑む意をあらはす職任をいひ、不定遇とは尊卑を定めずしてあらはす職任をいふ。

またその待遇の對象（待遇を受くる事物）の如何により待遇を四つに分ちて、自家待遇、所有待遇、關係待遇、對者待遇といふ。此の四者みなれの〳〵尊遇、卑遇、不定遇を有す。

自家待遇

体詞の自家待遇とは「その体詞自らが表はす所の事物」に對する尊卑の意をあらはすものなり。

自家尊遇　自家尊遇とはその体詞が表はす所の事物に對する尊む意をあらはす職任なり。たとへば名詞にて此

ノ方、彼ノ方などいふ「方」または「花子サン」「鳥子サン」など、代名詞にて「アナタ」「アナタサマ」などの自家尊遇なるがごとし。

体詞が自家尊遇を表はすには別語によるものあり。此ノ人、彼ノ人などの「人」を此ノ方、彼ノ方などの如く「方」といひ、父、母をオトウサン、オツカサンなどいひ、オマヘをアナタといひ、人名にかふるに官名を以てするなど、助辭にて華族ラ、大臣ラを華族タチ、大臣タチといふなど全く異なる詞をもちることとなり。されど体詞中自家尊遇をあらはすべき別語あるものはなはだ少なし。

体詞は自家尊遇をあらはす助辭のサマ、サン、ドン、クン（五十八頁）を後附すれば自家尊遇となるものなり。神サマ、雷サマ、知事サマ、御姫サマ、息子サン、娘サン、金ドン、竹ドン、鈴木クン、

伊藤クンなどの如し。小兒の詞又は小兒に對していふ詞としてはサマ、サンはチヤマ、チヤンといふこと多し。又大臣ドノ、知事ドノなどの如くドノといふ助辭の稀には用ゐられぬにはあらねど、其は氣取りたる話に限るものなり。サマはもと樣にて尊むべきものを直にさすは失禮なればその有樣をさすやうにいへるがもとにて自家尊遇の助辭となれるものなり。サンはサマの音便なり。サマ Sama の a の略かれて m のみとなり、ng とも發音せらるゝなり。ドンはドノの音便、ドノ Dono の。の略かれて n のみとなり、ng とも發音せらるゝなり。ドノは殿にてもと貴人の居る殿をさしたる詞なり。クンは漢語の君なり。

体詞はまた詞の熟合（五十四頁）によりて自家尊遇をあらはすことあり。知事閣下、校長閣下、西郷大將、森文部大臣などの如し。

自家卑遇　自家卑遇とはその体詞があらはす所の事物に對する卑む意をあらはす職任なり。たとへば彼ノ人、此ノ人などいふべきを彼ノ奴、此ノ奴などいふ「奴」などの自家卑遇なるが如し。

自家卑遇は別語によりてあらはさるゝものあり。名詞にて人といふべきを「ヤツ」（奴）「ヤツコ」（奴）「野郎」などいひ、代名詞にてアナタ、此ノ人、其ノ人、彼ノ人、孰ノ人といふべきを「手前」「此奴」「其奴」「彼奴」「孰奴」などいひ、助辭にて、盗人ラ、私ラを盗人ドモ、私ドモなどいふが如し。その他「三文奴」「ケダモノ」「トンチキ」「モクチンジン」「スリコギ」「ヒヨーロクダマ」「亡者」「ヒヨツトコ」「トウガン」「ヘチヤモクレ」などいふが如き皆自家卑遇をあらはす別語なり。

体詞はすべて待遇をあらはす助辭のメを附すれば自家卑遇となる。犬メ、盗人メなどの如し。

メの語源はムレ（群）なり。ムレの約音（Mure のミを約す）なり。あまり尊くもあらぬもの丶數多あるをいひて、卑む心をあらはしたるなり。

自家不定遇　自家不定遇とはその体詞があらはす所の事物に對する尊卑の意をいはずしてあらはす職任なり。神、人、大臣、知事などの如し。

自家不定遇は体詞そのまゝにしてあらはすものなり、即尊遇にも卑遇にもあらぬものは不定遇なり。

所有待遇

体詞の所有待遇とは（その体詞自らが表はす所の事物に對する尊卑の意をあらはすものにはあらずして）その体詞の表はす事物の所有者に對する尊卑の念をあらはすものなり。（自家待遇の定義と比較すべし）

所有尊遇　体詞の所有尊遇とはその体詞があらはすところの事物の所有者に對する尊む意をあらはす職任なり。たとへばアナタノ御宅、彼ノ方ノ御親類などいふ御宅、御親類などの如し。宅、親類そのものを尊びたるにはあらで宅、親類の所有者なる、アナタ、彼ノ方を尊びたるなり。アナタノ御子サン、御娘サンの御子サン、御娘サンなどは自家尊遇にて且所有尊遇なるものなり。即、サンによりて子、娘そのものを尊び、御によりてその所有者（即父）なるアナタを尊びたるものなり。自家待遇と所有待遇との、區別および關係よくわきまふべし。

所有尊遇は別語によりて之をあらはすものあり。令息、令夫人、令妹などの如し。文章にてはこれらは熟合語なれど俗語

にては一詞なり。

所有尊遇をあらはすには、待遇をあらはす頭辭、オ、ゴを前附す。オ家、オ宅、オ子サン、オ娘サン、ゴ親類、ゴ家内、ゴ心配、ゴ系圖などの如し。但し固有名詞、代名詞はこの限にあらず。通例オ多く用ゐられ、ゴはたゞ三音以上の漢語にのみ用ゐらる。オは日本固有の詞なれどもゴは漢語の御なるを以てなり。オはオン(御)のンの略かれたるもの、オンはオホンのホの略かれたるもの、オホンはオホムなり。オホムは大御(おほみ)の通音(母音調和 Vocale harmony)なり。

所有尊遇はオによりてあらはすべしといへどもオによりてあらはすもの必しも所有尊遇にあらず。たとへばオ金、オ魚などのことし。これらはたゞオをそへて詞をうるはしくしたるまでにてその所有者を尊びたるものにあらず。

〔所有卑遇〕　所有卑遇とはその体詞のあらはす事物の所有者を卑む意をあらはす職任なり。我が國語は此の職任をあらはすべき方法なし。隨つてその外形的法則(二頁)あることなし。(他の國語には無論なり)

所有不定遇　所有不定遇とはそのあらはす事物の所有者に對する尊卑の意を示さずして其の事物をあらはす職任なり。たとへば息子、娘、息子サン、娘サンなどの如し。息子サン、娘サンなどは息子、娘そのものを尊ぶ意はあれど、その所有者を尊ぶ意の有無に至りては不定なり。

關係待遇

体詞の關係待遇とは作用(存在も)をあらはす体詞に屬する偶有的職任にしてそのあらはす作用の歸着關係する事物(廣義の客体 Object)に對する尊卑の意をあらはすものなり。

關係尊遇　体詞の關係尊遇とはうの体詞のあらはす作用の歸着關係する事物に對する尊む意をあらはす職任なり。アナタニ御禮ヲ申シマス、彼ノ方ニ御謝ナナサイの御禮、御謝などの如し。御禮、御謝は禮、謝といふ作用の歸着關係する事物（授受の客体）なるアナタ、彼ノ方に對する尊む意をあらはせり。

關係尊遇をあらはすには待遇をあらはす助辭のオ（御）ゴ（御）を前附す。「御助」「御願」「御返事」「御進物」「御返禮」「御進上」などの如し。

御助、御願等は皆、關係待遇をあらはすにも所有待遇をもあらはすにも用ゐらるゝものなり。たとへば若樣ノ御助ヲ致ス、アナタニ御願ガアルなどの御助、御願はその歸着すべき若樣、アナタを尊むを以て關係尊遇なれどアナタノ御助ガ無カッタラ、アナタノ御願ノスヂハなどの御助、御願の如きは所有待遇なるが如し。

待遇の助辭オはもと大御といふことばより出てたるものなれば元來は所有尊遇をあらはすべきものなり。されど轉じて關係尊遇をもあらはすに至れり。漢語のゴ（御）も然り。

〔關係卑遇〕　關係卑遇とはその体詞のあらはす作用の歸着關係する事物を卑む意をあらはす職任なり。この職任をあらはす方法は我が國語に欠けたり。（外國語はいふまでもなし。）

關係不定遇　關係不定遇とはその体詞のあらはす作用の歸着關係する事物に對する尊卑の意をいはずしてあらはす職任なり。返禮、返事などの如し。その歸着關係する事物に對する尊卑の意をあらはすことなし。

對者待遇

体詞の對者待遇とは体詞に屬する偶有的職任にして談話の對者（即談話を聽くべき人）に對する、講話者（談話の主体即談話を話す人）の尊卑の念をあらはすものなり。

對者尊遇　對者尊遇とは談話を聽くべき人に對する尊む意をあらはす職任なり。

對者尊遇は自稱の代名詞はよく之をあらはす。たとへば「ワタクシ」「ワタシ」「僕」「拙者」「手前」などの如し。ワタクシ、ワタシは公ならぬ私なる一個人の意、僕は人に從屬する意、拙者は拙き者の意、手前は已の前の意より出でたる詞にしていづれも自家卑遇（七十二頁）をあらはすべきものなり。されどかく自らを卑むるは對者に對する謙遜なればそれやがて對者を尊むことゝなり、今は既に自家卑遇たりし原意を忘れて全く對者尊遇の詞となれり。但し「僕」などは對者を尊む程度はなはだ低し。

對稱の代名詞に「アナタ」「キミ」などといふことはあり。これらは對者尊遇といはゞいふべし。されど自家尊遇と見る方適當なるべし。

以上述べたるごとく自稱、對稱の代名詞は對者尊遇をあらはすといへども他の体詞は之をあらはす方法あることなし。

對者卑遇　對者卑遇とは談話を聽くべき人に對する卑む意をあらはす職任なり。たとへばオレ（我）などの如し。オレは多少對者をいやしむ意あること多し。自稱の代名詞よりほかには對者卑遇をあらはす体詞あることなし。對稱の代名詞のオマイ、キサマ、テマイなどは對者卑遇のごとくなれども、これは對者を卑むといふにはあらで誠は其の詞の

あらはす事物を卑むものなれば對者卑遇にはあらずして自家卑遇なり。たゞ偶然、對者を卑む事となるのみ。かくのごときことよく辨ふべし。

對者不定遇　對者不定遇とは談話を聽く人に對する尊卑の意を定めずして事物をあらはす職任なり。山、川、オレ(我)アイツ(彼奴)オマイ(御前)などの如し。對者尊遇、對卑遇ならざるものはすべて對者不定遇なり。オレなどいふ代名詞は對者卑遇といふをうべし。されど對者を卑む意はなはだ程度低く、時には更に無きことあり。故に對者卑遇たることあり對者不定遇たることあり。

自家待遇、所有待對、關係待遇、對者待遇の別はその待遇の對象即その待遇(尊卑)せらるゝ事物が自家なるか所有者なるか關係物なるか、談話の對者なるかによりて生じたるものなり。從來この別を考へずしてたゞ尊稱、賤稱などいひたることなれば學ぶ者との別を煩はしく思ふべきも、この別は重要なることにして談話演說等に必忘るべからざることなれば、よく注意してその別を辨ふべし。對者尊遇にいふべき所を自家尊遇にいへるなどは甚きゝにくし。

今四種の待遇の關係上の表をかゝぐ。對者待遇は代名詞に存するを以て自家待遇との關係上甚混雜す。故にまづ此の表をかゝぐ。自家待遇と關係待遇との關係、または所有待遇及關係待遇と對者待遇との關係は實際あるべきものにあらずたゞ吾人か形式上關係せしめうるに止まりて實際上の關係は無意義なり。故にこの關係は今のせず。

表中(ゑ)といふ字あるは論理上ありうべき職任なれどもたゞ之をあらすべき方法、外形的法則(三五)の我が國語に欠けた

るものなり。たとへば對者卑遇などの如し

表中○を附したるは論理上決して考へうべからざる職任なり。たとへば對稱の自家尊遇にして、自稱の對者尊遇なるものの如き又は圓き三角形の如きものはとれありと考へうべからざるが如し。

表中〔〕を附したるは形式上たゞ云ひうるまでにて實際の意義に於て無意義なるものなり。たとへばワタシ樣、アナタメなどの如し、

表中アナタといふ代名詞は、かりに對者尊遇として用ゐたり（第七十九頁參考）。されとこれは自家尊遇としてみるべきものなれは特に片假名もてかきわけたり。

表中オレといふ代名詞は平假名にてかけるは對者不定遇なる場合にして片假名もてかけるは對者卑遇なる場合な

自家待遇、對者待遇關係の表

自家待遇																							
		尊遇			卑遇			不定遇															
		自稱	對稱	外稱	自稱	對稱	外稱	自稱	對稱	外稱	自稱	對稱	外稱	自稱	對稱	外稱	自稱	對稱	外稱	自稱	對稱	外稱	自稱	對稱	外稱
對者待遇	尊遇	〔私樣〕	○	○	私め	○	○	私	○	○	〔私樣〕	○	○	私め	○	○	私	○	○	私	○	○	私	○	○
		○	アナタ樣	○	○	〔アナタメ〕	○	○	アナタ	○	○	アナタ樣	○	○	〔アナタメ〕	○	○	アナタ	○	○	アナタ	○	アナタ	○
		○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)
	卑遇	オレ樣	○	○	〔オレメ〕	○	○	オレ	○	○	オレ樣	○	○	〔オレメ〕	○	○	オレ	○	○	オレ	○	○	オレ	○	○
		○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	○	(欠)	○	(欠)	○	○
	不定遇	おれ樣	○	○	〔おれめ〕	○	○	おれ	○	○	おれ樣	○	○	〔おれめ〕	○	○	おれ	○	○	おれ	○	○	おれ	○	○
		○	おまい樣	○	○	おまいめ	○	○	おまい	○	○	おまい樣	○	○	おまいめ	○	○	おまい	○	○	おまい	○	おまい	○	○
		○	○	あの方	○	○	あいつ	○	○	あれ	○	○	あの方	○	○	あいつ	○	○	あれ	○	○	あれ	○	○	あれ

自家待遇
所有待遇
關係の表

自家待遇

尊遇	卑遇	不定遇
御娘樣	御娘め	御娘
(欠)	(欠)	(欠)
娘樣	娘め	娘

所有待遇

尊遇	卑遇	不定遇
尊遇	卑遇	不定遇
御娘樣	御娘め	御娘
(欠)	(欠)	(欠)
娘樣	娘め	娘

關係待遇
所有待遇
關係の表

關係待遇

尊遇	卑遇	不定遇
御禮	(欠)	(欠)
(欠)	(欠)	(欠)
禮	(欠)	(欠)

所有待遇

尊遇	卑遇	不定遇
尊遇	卑遇	不定遇
御禮	(欠)	(欠)
(欠)	(欠)	(欠)
禮	(欠)	(欠)

り。

表中自稱、對稱、外稱とあるは必しも代名詞にかぎるものにあらず。名詞にても話す人を表はす場合には自稱といひ、聽く人をあらはす場合には對稱、局外者をあらはす場合には外稱といふなり。

体詞の數

体詞の數とは体詞の一偶有的職任にして其の体詞の表はす事物の數の如何を示すものなり。數を分ちて單數、複數、不定數の三つとす。

單數　單數はその体詞のあらはす事物の數の一個なるを示す偶有的職任なり。たとへばアナタハ、ドチラノ御方デスカのアナタ、御方などの如し。この場合にアナタ、御方といふ体詞によりてあらはさるゝ事物の數は一個なり。

体詞中話説代名詞(十三頁)及行動の代名詞(十八頁)はそのまゝにして單數なり。たとへはワタシ、アナタ、アレ、自分、他人などの如し。

他の体詞も亦そのまゝにして單數たり。然れども亦そのまゝにして複數及不定數たるとあるなり。たとへは筆ヲ一本買フの筆は單數、筆ヲ澤山買フの筆は復數、筆ヲ買フの筆は不定數なるが如し。

複數　複數とはその体詞のあらはす事物の數の二個以上なるを示す職任なり。たとへはアナタガタハ、ドチラノ方々デスカのアナタガタ、方々などの如し。アナタガタ、方々といふ体詞のあらはす事物の數は複數なり。

体詞は之にラ(等)、タチ(達)、ドモ(共)、ガタ(方)(五十六頁)などといふ助辭を後附すれは複數となる。たとへはワタシラ、ワタシタチ、ワタシドモ、華族ラ、華族タチ、華族ドモ、華族ガタなどの如し。但し人格ある事物をあらはす場合ならでは附することなし。たとへは山ラ川タチなどいはぬが如し。またドモは自家卑遇をあらはし、ガタは自家尊遇をあらはすを以て矛盾すべき待遇の体詞にはそはず。たとへはワタシガタ、華族樣ドモなどとはならぬがごとし。

又ある体詞は同じ詞を二つ重ねて複數をあらはすものあり。國々、年々、人々、名々などの如し。これ詞の熟合なり。

話説代名詞及行動の代名詞は以上の方法によらずしては複數とならぬといへども、他の体詞は單數と同下形のまゝにて複數たること少なからず。たとへは前にあげたる筆ヲ澤山買フの筆の例の如し。此の如く同じ形にて單數たり複數たるは文法的關係(五十五頁)によりてその職任をあらはすな

り。

不定數　不定數とはその体詞のあらはす事物の數を定めずしてあらはす職任なり、たとへば木ヲ切ル、花ガ散ルの木、花などの如し。いづれもその數の一個なるか二個以上なるかを定めずして木、花をあらはせり。

話説代名詞及行動の代名詞は不定數たる形なし。たとへば私といへば單數、私ラといへば複數にて單複に通用せらるべき云ひ方なきが如し。

他の体詞は數に關する變化をば未うけざる形（單數と同形）を以て不定數をあらはす。たとへば前例の木、花などの如し。

体詞の量

体詞の量とは体詞の一偶有的職任にしてその体詞のあらはす事物以外にその事物と同事情なるものありや否やを

示すものなり。量を二つに分ちて單量、複量、不定量といふ。

單量　体詞の單量とはその体詞のあらはす事物以外にその事物と同事情のものなきを示す職任なり。たとへば人バカリガ理性的動物デアル、夜ヲ守ル動物ハ犬バカリデアルの人バカリ犬バカリなどの如し。人バカリは人以外に人と同事情の（即理性的動物なる）ものなきを示し、犬バカリは犬以外に犬と同事情の（即夜を守る動物なる）ものなきを示せり。

單量を示すにはバカリバカリ、バカ（五十七頁）などいふ助辭を後附す。たとへば人バカリ、私バカリ、アナタバカなどの如し。バカリは計ルといふ動詞より出でたるもの、バカはバカリの略音なり。

複量　体詞の複量とはその体詞のあらはす事物以外にその事物と同事情のものゝあるを示す職任なり。たとへ

は人ナドハ動物デアル、犬ナドハ動物デアルの人ナド犬ナドの如し。人ナド、犬ナドは人、犬以外にそれと同事物のなるものゝあるを示せり。

複量を示すにはナド、ナヅ、ナンヅ、ナンカ、ヤナンカ(五十六頁)などいふ助辭を後附す。たとへば人ナド、私ナヅ、人ナンヅ、私ナンカ、人ヤナンカなどの如し。ナヅはナドの通韻、ナンヅはナヅの音便なり。ナンカは何カの音便にて、その事物以外に何物かのあるを示す。ヤナンカはヤ何カの音便なり。

不定量　体詞の不定量とはその体詞のあらはす事物以外にそれと同事情なるものゝ有無を定めずしてその事物をあらはす職任なり。たとへば人ガ行ク、花ガ散ルの人、花などの如し。人以外に行くものゝありや否や、花以外に散るものゝ有りや否やは不定なり。

体詞は量に關する變化を未少しもうけざるものは皆不定量なり。たとへば前例の人、花などの如し。

体詞の格

体詞の格とは体詞の一偶有的職任にして、その体詞の他の詞に對する意義上の關係を示すものなり。たとへば花ガ散ルの花ガは散ルといふ詞に對して散ルといふ作用の主体をあらはすといふ關係にあり、風ガ花ヲ散ラスの花ヲは散ラスといふ詞に對して散ラスといふ作用の客体をあらはすといふ職任にあるを示せるが如し。

体詞の格を分ちて主格、處格、受格、比格、聲格、與格、發格、着格、志格、領格、係格、同格、呼格、重格の十四とす、之を日本語の体詞の十四格といふ。

主格　主格とは事件の主体を表はす格なり。説明の對

象を表はす格なり。例へば山ガ高イ、川ガ廣イ、私ノ行ク時アナタガ歸ルの花ガ、川ガ、ワタシノ、アナタハなどの如し。川ガは高イの主体をあらはし、川ガは廣イの主体、ワタシノは行クの主体をあらはし、アタナハは歸ルの主体をあらはせり。主格をあらはすにはガ、ノ(五十七頁)といふ助辭を後附す。前例の山ガ、川ガ、私ノなどの如し。ノは下に來る用詞が、切れぎして下につゞく時にのみ用ゐらる。前例の私ノ行クの行クは時といふ詞につゞけり。又制限をあらはす助辭(六十二頁)たとへばハ、モなどの如きものゝうふ時にはガ、ノをうふることなし。たとへば私ハ行ク、アナタモ行クといひ私ガハ、アナタノモなといはぬが如し。

また体詞はある單純なる場合にはガ、ノをうへずして主格をあらはすこと稀にはあり。たとへば私知ライヨの私などの如し。主として人をあらはす体詞に用ゐらる。

處格　處格とは事件の直接的客体(第二客体)を表はす格なり。風ガ花ヲ散ラス、雲ガ月ヲ隱スの花ヲ、月ヲなどの如し。花ヲ、月ヲは散ラス、隱スといふ事件の直接的客体を表はせり。處格を示すにはヲ(五十七頁)といふ助辭を後附す。前例の花ヲ月ヲなどの如し。されどこれは嚴格なる言葉づかひにして、語尾變化によりて處格をあらはすを通例とす。その語尾變化は左の如し。

体詞の語末のア列(四a)に終るものは語尾をア列(四a)の長音に變ず。たとへば花を、花ア(ハナー)、山を山ア(ヤマー)といふが如し。「花ア(ハナー)見ル」「山ア(ヤマー)買ウ」といへば花ヲ見ル山ヲ買ウといへると同義なり

語末のイ列(四i)に終るものもまた語尾を長音に變ず。火を火

イといひ、飯を飯イといふが如し。火イッケル、飯イ食ウなどいふ。

又語末のイ列(即一)に終るものは語尾を拗音の長音に變ずることあり。飯を飯ョオ(メショー)といひ、月を月ョオ(ツキョー)といふが如し。飯ョオ(メショー)食ウ、月ョオ(ツキョー)見ルなといふ。但しこの變化は一音の詞には行はれず。火をヒョオといはぬが如し。この語尾變化はもとは助辭のヲより轉せるなり。

語尾のウ列に終るものも語尾を長音に變ず。湯を湯ウ(湯ウ飲ム)、水を水ウ(ホウ飲ム)などいふが如し。

又語末のウ列(即二)に終るものは語尾をオ列の長音に變ず。例へば水策を水ォオ(ミソー)飲ム、策ォオ(サコー)メグラスなどの如くミソー、サコーなどいふが如し。この變化も助辭のヲより來れるものなり。

語末のエ列(即三)に終るものも語尾を長音に變ず。酒竹を酒ーエ飲ム、竹ーエ折ルなどの如く酒ーエ、竹ーエといふが如し。

語末のエ列に終るものはまた語尾を拗音の長音に變ずることあり。酒を酒ョオ(サキョー)、竹ョオ(タキョー)などいふが如し。サキョー飲ム、タキョー折ルなどいふ。この變化も助辭のヲより來れるものなり。

語末のオ列(即四)に終るものも語尾を長音に變ず。例へば人、床を人ーオ(ヒトー)殺ス、床ーオ(トコー)布クなどの如く、ヒトー、トコーといふが如し。(以上六十四頁十行目より、次頁五行目マデ參考)

受格　受格とは動作事情の歸着する關係を受くる格なり。都ニ居ル、アナタニ教ヘル、私ニ頼ム、人ニ言ハセルの都ニ、アナタニ、私ニ、人ニなどの如し。

受格を示すには ニ(五十七頁) といふ助辭を後附す。たとへば前例

の都ニ、アナタニ以下の如し。

比格　比格とは他の体詞のあらはす事物に比較してそのうれに一致するを表はす格なり。たとへば小供が大人ニナル、桑田ガ海ニ變ズル、教師トモアル者ガの大人ニ、海ニ、教師トなどの如し。大人は小供を之に比較し、海は桑田を之に比較し、教師は者を之に比較してその一致するを示せり。その他天氣ニナル、壯健ニナル、鐵ヲ化シテ金トナス、善ニ交レハ善トナルなどの天氣ニ、壯健ニ、金ト、善トなど皆比格なり。比格をあらはすには二(五十七頁)、ト(五十八頁)を後附す。たとへば前例の大人ニ、海ニ以下の如し。

聲格　聲格とはものゝ聲音をあらはす格なり。東京ト云フ所、富士山ッテ山、イヤダト云フの東京ト、富士山ッテ、イヤダトなどの如し。皆聲音として待遇せらるゝなり。イヤダはこ

の場合にはたゞイヤダといふ聲音をあらはす体詞として待遇せらる。

聲格を示すには助辭又は語尾變化に由る。助辭によるときはト(五十八頁)を後附す。東京ト、イヤダトなどの如し。語尾變化によりてはッテ(六十五頁)を語尾とす。東京ッテ、イヤダッテなどの如し。

與格　與格とはある事物の事件の與同者をあらはす格なり。私ガアナタト話ス、アナタガ私ト逢ヒマシタ、桃ガ櫻トイッシニ咲イタの「アナタト」「私ト」「櫻ト」などのごとし、

與格を示すにはト(五十八頁)といふ助辭を後附す。たとへば前例の「アナタト」「私ト」「櫻ト」などの如し。與格、聲格、比格はいづれもトによりて示さるゝを以て外形は同一なれど、その職任は大に異なり。混すべからず。

發格　發格とは動作の發し出づる場所を表はす格な

り。「鳥ガ木カラ木ヘ飛ブ」「私ガ東京カラ京都ヘ行ク」「此所カラ向フヲ見ル」の「木カラ」「東京カラ」「此所カラ」などの如し。

發格を示すにはカラ(五十七頁)といふ助辭を後附す。たとへば前例の「東京カラ」以下のごとし。文章にてはヨリを附するところなり。

着格　着格とは動作の到着する所を表はす格なり。たとへば「鳥ガ木カラ木ヘ飛ブ」「私ガ東京カラ京都マデ行ク」「萩ヲ庭ヘ植エル」「家ヘ置ク」「向ノ方ヘ見エル」「此所ヲ來ル」「舟ニエ乘ル」の「木ヘ」「京都マデ」「庭ヘ」「家ヘ」「方ヘ」「此所ヲ」「舟ニエ」などの如し。

着格を示すは助辭および語尾變化による。助辭による時はヘ、マデ(五十七頁)を後附す。木ヘ、東京ヘ、木マデ、東京マデなどの如し。語尾變化による時はヲ(六十五頁)を語尾にす。東京ヲ、此所ヲなどの如し。但し語末のエ列(四段)に終るものは之を長音にす。舟ニエ、といはずして舟ニエ(フネー)といふが如し。この語尾變化はもと助辭のニより來れるなり。

志格　志格とは動作の目的(志望の對象)をあらはす格なり。たとへば花見ニ行ク、若菜摘ニ來タ、本ヲ敎ヘー行ク、月ヲ見ヲ行クの「花見ニ」「若菜摘ニ」「月ヲ見ヲ」「本ヲ敎ヘー」などの如し志格をあらすには助辭のニを附することあり「花見ニ」「若菜摘ニ」などの如し。また語尾をヲにすることあり。「月ヲ見ヲ」の如し。又語末のエ列に終るものにかきりヲを附せずして其を長音にす。「本を敎ヘー」の如し。この語尾變化はいつれも助辭のニより來れるなり。

領格　領格とはものゝ所有者を表はす格なり。例へば「私ノ琴」「アナタノ箏」「彼ノ人ン所」の私ノ、アナタノ、人ンなどの

でとし皆琴、箏、所の所有者をあらはせり。

領格を示すには ノ(五十七頁)といふ助辭を後附す。前例の私ノ、アナタノなどの如し。またトコ、トコロなといふことばに續くときには語尾を撥音とすることあり。人ン所、私ン所などの如し。ンはノの音便(NOOOの略)より來れるなり。

又我ガ子、我ガ物などガをそへて領格を示すことあれど其は文章の事にて口語にては「我ガ子」「我ガ物」なとを一熟合詞とみるを可とす

係格　係格とはある事物に關係ある他の事物をあらはす格なり。春ノ朝、秋ノ夕暮、水ン中の「春ノ」「秋ノ」「水ン」などの如し。みな朝、夕暮、中に關係ある事物をあらはせり。

係格を示すには ノ(五十七頁)を後附す。たとへは前例の春ノ、秋ノなとのごとし。またナカなといふことばにづゞくときには

語尾變化にて、撥音にするふとあり。たとへは「川ン中」「水ン中」などのごとし。

同格　同格(形容格とも)とはその体詞のあらはす觀念の一部又は全体と他の体詞のあらはす觀念の一部又は全体と同一なるをあらはす格なり。たとへは、内臣鎌足、九郎義經烈婦ノ袈裟、忠臣ノ清麿、生田ノ森、富士ノ山、其所ン所、其所等ン所の内臣、九郎、烈婦、忠臣、生田ノ、富士ノ、其所ン、其所ランなとの如し。そのあらはす觀念は鎌足、義經、袈裟、清麿、森、山、所等のあらはす觀念と一部又は全体に於て契合せり(即同一物なり。)

同格には助辭のノ(五十七頁)を附すること常なり。たとへは前例の烈婦ノ、忠臣ノなどのごとし。或は更に變化を加へざることあり。たとへは前例の内臣、九郎などの如し。又トコ、トコロなどにつゞく場合には撥音となるふとあり。其所ン所などの

如し。これ助辭のノより轉じたる語尾變化なり。

ノといふ助辭は何故に領格に於ても係格、同格に於てもトコロ、ナカなどいふ詞につゞくときのみンといふ語尾となるかといふに、これ聲音の關係より然るなり。トコのトの父音(t)、ナカのナの父音(n)は齒根舌音なる故に同じく齒根舌音なる、助辭のノの父音ン(n)よりつゞきやすきを以てン(n)より直につゞくなり。

領格、係格、同格は外形に於て全く相似たれど、その職任は大に異なり。よく辨ずべし。

重格　重格とは自らは格を定めずして他の体詞の上に重なり、その体詞と同事情同一關係なるを示す格なり。同資格を以て二個以上の体詞の重なる場合に下の体詞に對して上の体詞の格を重格といふなり。春ハ花ヲ見、秋ハ、月、冬ハ雪ヲ視ルの月のごとし。雪と同資格にて之に對して重格なり。私ハ文ヲ習ヒ、アナタハ歌、アノ人ハ詩、此ノ人ハ琴、其ノ人ハ畫ヲ習フの歌、詩、琴は、畫と同資格にして之に對して重格なり。

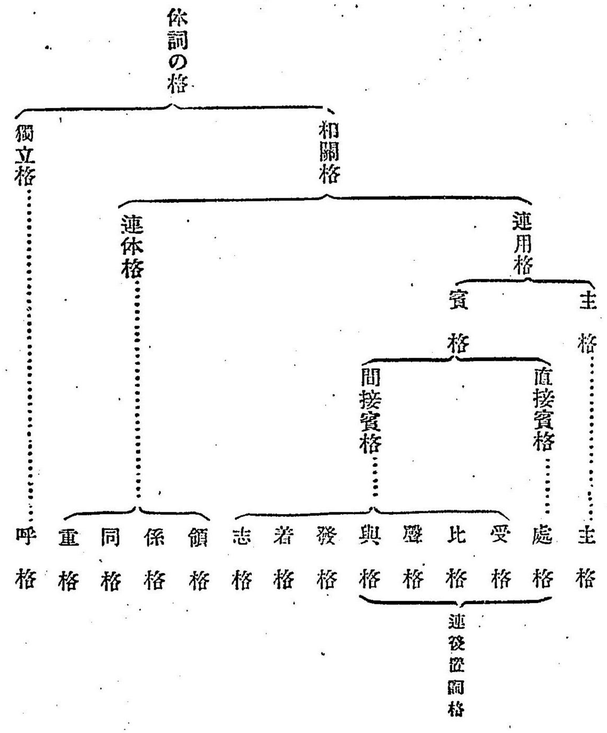
重格は別に變化を加へず、そのまゝにして、之をあらはす。たとへば前例の月、歌、詩、琴などの如し

呼格　呼格(又獨立格)とは他の語と更に文法上の關係なき絶對獨立の格なり。由子ヤ、早ク御出ヨ、花子其ヲ取ッテオクレの由子ヤ、花子などの如し。呼格とは多くよびかくる意ある故にかく名づけたるなり。

呼格はヤなどといふ感嘆の助辭のそふごと多し。然れどもまたそはざるもとあり。

格の分類　格を分ちて以上の十四種とすといへども直

体詞の格分類の表



にかく分ちたるものにあらず。いまつぎにその分類の次第をいはむ。

体詞の格を分ちて相關格、獨立格の二つとす。相關格とは他の詞と相關係として以て一思想をあらはすべき格にして主、處、受、比、聲、與、發、着、志、領、係、同、重の十三格あれなり。獨立格とは他の詞と文法的關係を有すべからざる獨立絶對の格にして呼格あれなり。

相關格を分ちて連用格、連体格の二つとす。連用格とは用詞に係る格にして主、處、受、比、聲、與、發、着、志の九格なり。連体格とは体詞に係る格にして領格、係格、同格、重格の四つなり。

連用格を分ちて主格、賓格の二つとす。主格は前(九十一頁)に述べたる如く事件の主体をあらはす格なり、賓格(客格の意)とは事件の客体をあらはす格にして處、受、比、聲、與、發、着、志の八格あれ

なり。

賓格を分ちて直接賓格、間接賓格の二つとす。直接賓格とは事件の直接的（第一的）客体を表はす格にして處格これなり。間接賓格とは事件の間接的（第二的）客体をあらはす格にして受格、比格、聲格、與格、發格、着格、呼格の七つなり。

また、處格、受格、比格、聲格、與格の五つは後置詞の前に來ることあるを以て連後置詞格といふ。

体詞の制限

体詞の制限とは体詞に屬する一偶有的職任にして「その体詞の意義を制限拘束してその體詞の表はす事物と相對立する事物との關係をあらはすものなり。たとへば私モアナタモ行ッタガ彼ノ人ハ行カナイに於いて私、アナタ、彼ノ人は行く行かすなどいはるゝ點に於いて對立の事情にあり。

「私モ」は對立の事情にあるアナタに對して同一事情にあるを示し「アナタモ」は對立の事情にある「私」に對して同一事情にあるを示し「彼ノ人ハ」對立の事情にある「私」「アナタ」に對して異なる事情にあるを示すが如く凡べて類似反對範圍分量等の關係を示すものなり。

体詞の制限は連用格（百五頁）の体詞に屬するものにして格未定らざる体詞および他の格の体詞には制限あることなしたとへば前例の私モ、アナタモ、人ハなど皆連用格にして連用格ならぬ私ノ、アナタノ、人ガなどは私ノモ、アナタノモ人ガハなどはいはれぬが如し。

制限はハ、モ、サヘ、サイ、スラ、バカリ、バッカリ、バッカ、マデ、コソ、シカ、シキ等の「制限の助辞」を附することと及一二の語尾變化によ

りてあらはさる。

ハ　連用格の体詞はハ(ア)をうふる時はその表はす事物に類似せる事情にある事物に對して異なる事情にあるを示す詞となる。たとへは前例の人ハなどの如し。

バ　されはハより來れる語尾なり。チのそひたる處格体詞は之をチバとすれはハを附したると同義となる。花チバ見タガ、月チバ見ナイなど。東京にてはいはず。

-ア　連用格の体詞にして語末のア列(即ち)オ列(即ち)に終るものは之をア列の長音にすれは(即ち-アをそ(又は。をさりて-アをふれば)ハを附したると同意となる。山-ア高イ、ソカ-ア(庶-ア)深イの「山-ア」「ソカ-ア」などの如し。

-ヤ-ア　連用格の体詞の語末のイ列(即ち)エ列(即ち)に終るものは語尾を拗音の長音にすれは(即ち-ヤ-アを附すれば)ハを附したると同義となる。ツキ-ヤ-ア(月-ヤ-ア)出タ」「サキヤア(酒-ヤ-ア)飲ンダ」の「ツキヤ-ア」「サキ-ヤ-ア」などの如し。

-ア-ア　連用格の体詞の語末のウ列(即ち)に終るものはア列の長音にすれはハをそへたると同義となる。春-ア-ア(ハラ-)過ギタ、夏-ア-ア(ナツ-ア-)來タの「春-ア-ア」「夏-ア-ア」の如し。

ヤ　動詞より名詞となれるものにしてエ列(即ち)に終るものにはヤをうへてハをうへたると同義に用ゐることあり。逃ケヤシナイ、捨テヤシナイの逃ゲヤ、捨テヤなどの如し。逃ケ、捨テはこゝにては一の名詞なり。

バよりされまでは皆ハより來れる語尾變化なり

モ　連用格の体詞はモを附することによりてその表はす事物と類似せる事情にある事物に對して同一の事情にあるを示す詞となる。たとへは前例の私モ、アナタモなどの

如し。

サヘ、サイ　連用格の体詞はサヘ(サエ)サイをそふることによりてその体詞のあらはす事物よりも猶易く他の体詞のあらはす事物が、それと類似なる事情たり得べきをあらはす。たとへは私サヘ行ッタモノアナタニ行ケナイ物カ、木サイ折レル位ナノニ花ガ散ラズニハ居ナイの私サヘの如し私サヘ、木サイはサヘ、サイによりて「私」「木」が「行く」「散ル」といふ事情たるよりは「アナタ」「花ガ」「私」「木」と類似なる(即「行く」「散ル」といふ事情たるあとの易きを示せり。

連用格の体詞は又サヘ、サイを附することによりてそのあらはす事物のある事情が他の事物の事情よりもある事件に對して條件的に必要なるをあらはすものなり。たとへは天氣サヘ善ケレバ何ハドウデモ必參リマスの天氣サヘはサヘによりて「天氣」の善シといふ事情たることは、參ルといふ事件に對して他事物の或る事情よりも特に甚條件的に必要なるをあはせり。

スラ　連用格の体詞はスラを附することによりて、サヘの前の用法と同じ職任たるものなり。其スラ以テ出來ナイの其スラの如し、

バカリ、バッカリ、バッカ　連用格の体詞はバカリを附することによりてその表はす事物以外に、類似の事情にある事物中それと同一事情のものなきを示すものなり。私バカリ行ッタ、本バッカリ讀ム、字バッカ書クの私バカリ、本バッカリ、字バッカとの如し。私、本、字と同一事情のものなきを示せり。バカリは動詞の「ハカル」より來れる助辞なり。バッカリはバカリの音便バッカはバッカリの略音なり。

マデ　連用格の用詞はある事情にあるか上にその事情の、うの体詞のあらはす事物にまで及ぶをあらはすものなり。彼ノ人ハアナタバカリデナク私ヲマデ怨ンデマスの私ヲマデの如し。私ヲマデは怨マルといふ事情の「アナタ」に止らす「私」にまで及べるをあらはせり。

コソ　連用格の用詞はコソをそふるときは類似の事情にある事物中特にその事物の或る事情に對して關係多きを示す詞となる。私コソ失禮デシテの私コソの如し。

シカ、シキャ　連用格の用詞はシカ、シキャをそふることによりて、うの体詞のあらはす事物以外をあらはす詞となる。其シカ無イ、花トシキャ見エナイの其シカ、花トシキャなどの如し其シカは「其」以外の事物を表はシ、花トシキャは「花ト」以外をあはせり。シカの語源はホカ又はシキリハなるべし。シキャはシカの轉か。

ッキャ　連用格の体詞はッキャといふ語尾をそへてシカ、シキャをそへたると同じ意をあらはすことあり。其ッキャ無イ、僕ッキャ知ラナイの其ッキャ、僕ッキャなどの如し。但しあのッキャといふ語尾は、語尾變化によりて作れる處格體格にはそふことと其困難なり。たとへはッキョーッキャ(月ナシキャ)見ナイ、善イッテッキャ云ハナイなどはやゝ云ひがたきが如し。

制限の助辭及語尾はすべて主格の体詞にそふ時には必主格を示す助辭をのぞきて添ふものなり。たとへは花ガ、月ノ等にハ、モ等がそふには花ガハ、月ノハなどゝはならずして花ハ、月モなどゝなるがごとし。サヘ、サイ、スラ、バカリ、バッカリ、バカ、マデ、コソ、シカ、シキャッキャ皆然り。

体詞の嘆否とはその体詞か觀念を單に知力的にあらはすや、觀念を、感情を交へて感嘆的にあらはすやを示す職任なり。

嘆否を分ちて直言及嘆言の二つとす。

直言　体詞の直言とは体詞が觀念を單に知力的にあらはす職任なり。山、川、月、花などの如し。

嘆言　体詞の嘆言とは体詞が觀念を感嘆的にあらはす職任なり。たとへば、何處へ行くとの問に「花見ニサ」と答ふる「花見ニサ」などの如し。問はずもがな、花見なるものをといふほどの感嘆をふくめり。

嘆言はヲ、ヲイ、ナ、ナア、サ、ヤ、などの、感嘆をあらはす助辭によりてあらはさる。花ガヲ、花ガヲー、花ヲナ、花ヲナア、花ヲサ、花子ヤ、花子ヨなどの如し。

体詞の造語

体詞は之を工夫して異なる詞を作ることをう。「勉强」は体詞なるに之にスルを附すれば勉强スルといふ用詞となり、一二は計數をあらはす体詞なるに第を附して第一、第二とすれば號數をあらはす体詞となるが如し。

造動詞　体詞は三種の方法によりて之を動詞とすることをう。

其の一、体詞をそのまゝ動詞として用ゐることあれなり。たとへば「其ハ何」ととひ「コレハ本」「アレハ筆」など答ふる「何」「本」「筆」の如し。体詞なれど「何ダ」「本ダ」「筆ダ」といふ意にて動詞として用ゐられたるなり。

其の二は助辭をそへて動詞とすることれなり。今左にその助辭のおもなるものをあぐ。（五十八頁五行目ヨリ五十九頁二行目マデ參考）

スル　作用をあらはす体詞は之にスルといふ助辭を附するときは動詞となる。たとへば「勉强」「忍耐」にスルを附して「勉强スル」「忍耐スル」などいふが如し。スルはうのそへる体詞と分ちて觀察するときは助辭なれどその体詞と助辭とを合せ一動詞として觀察するときは、前に体詞たりしものは動詞の語体にしてスルは語尾なり。

ブル　体詞はブルといふ助辭を附するときはその様をする意をあらはす動詞となる。たとへば學者、金持を學者ブル金持ブルなどいふ動詞にするが如し。

ガル　体詞はガルといふ助辭を附するときは自らその然々なりとする意をあらはす動詞となる。才子、通を才子ガル、通ガルなどいふが如し。

ダ　体詞は之にダをそへて或る事物がその体詞のあらはす事物と一致するをあらはす動詞とすることを得。たとへば人麿ハ詩人ダの「詩人ダ」の如し、人麿と詩人と一致するを示せり。ダはデアルのデアのつまりてダとなり、ルの略かれたるものなり。

ヂャ　ダに等し。デアルのデアのつまりてヂャとなり、ルの略けたるものなり。但しヂャは東京にては用ゐず。ダといふを可とす。

デス　ダに等し。たゞしダは對者不定遇なれどデスは對者尊遇なり。デスのデは左様デアルなどのデなり。スは爲ルのスなり。故に左様デスは左様デ爲ルなり。今もなほ左様デシテといふ所を左様デ致シマシテなどいふにて「爲」の原意明なり。

体詞を動詞にする其の一は語尾變化によることとなり。今そ

のれもなる語尾變化をいはむ。(六十六頁參考)

ッテエ　体詞は語尾としてッテエを附すれば何々ト云フといふ意の動詞となる。山、川を山ッテエ、川ッテエなどいふかおとし。山ト云フ、川ト云フの意なり。ッテエはト云フより來れるものなり。

ッテ　ッテエにひとし。

ッテヤ　体詞は語尾にッテヤを附すれば何々ト云へばといふ意の動詞となる。花、月を花ッテヤ、月ッテヤなどいふが如し。花ト云へバ、月ト云へバといふに同じ。ッテヤはッテイへバより來れるなり。

ッテバ　ッテヤにひとし。

ンッテエ　ナドといふ助辞のそへる体詞はナドのドをさりてンッテエを附すれば何々ナドト云フといふ意となる。たとへば武士ナド、商人ナドの語尾を變化して武ナンッテエ、商人ナンッテエなどいふが如し。武士ナンッテエ者、商人ナンッテエ者などの如く用ゐる。武士ナドト云フ者、商人ナドト云フ者の意なり。語源もナドト云フより來れり。

ナンッテ　ナンッテエに同じ。

造形狀詞　体詞は助辞又は語尾變化によりて形狀詞に變造することをう。

いま体詞を形狀詞に變せしむる助辞のれもなるものを左にあけむ。(五十九頁參考)

ラシイ　体詞はラシイを附すればその体詞のあらはす事物の如くあるをいふ形狀詞となる。人、女にラシイを附して人ラシイ、女ラシイなどいふが如し。

ゴト　体詞はゴトを附すればその体詞のあらはす事物

をも合せていふ意の形狀詞（用言にかゝる形狀詞）となる。たとへば箱、入レ物にゴトを附して箱ゴト、入レ物ゴトなどいふが如し。箱ゴトヨコセ、入レ物ゴトヤルなどの如く使用す。箱ノマヽ、入レ物ノマヽといふほどの意なり。ゴトはコトコトク（悉）のコトなり。

ニ　形狀をあらはす体詞はニを附すれは形狀詞となる。眞黑、無法などにニを附して眞黑ニ、無法ニなどいふが如し。眞黑ニ書ク、無法ニ早イなどの如く用ゐる。かゝる場に眞黑、無法とニとはその相合せざる前には一方は体詞にして一方は助辞なれど、その相合するや、体詞たりしものは形狀詞の語体にして助辞たりしものは形狀詞の語尾なり。

ト　形狀をあらはす体詞はトを添ふれは形狀詞となる。早々、長々を早々ト、長々トなどいふが如し。トは体詞にそふ

ときは形狀詞の語尾なり。

ヨリ　体詞はヨリを附すれは、其の物に屬する或る形狀の程度より他物のある形狀詞の程度か高きを示す形狀詞となる。父母ノ恩ハ山ヨリ高ク、海ヨリ深イの山ヨリ、海ヨリなどの如し。

ホド　体詞はホドを附すれは其のあらはす事物に屬するある形狀と、ある事物の形狀とが同程度なるをあらす形狀詞となる。父母ノ恩ハ山ホド高ク、海ホド深イの山ホド、海ホドなどの如し。

クラヰ　体詞はクラヰを附すれは其のあらはす事物に屬する形狀と、或る事物の形狀とが大抵同程度なるを示す形狀詞となる。父母ノ恩ハ山グラヰ高ク、海クラヰ深イの山グラヰ、海グラヰなどの如し。クラヰは体詞にそふときは体

詞の音の抑揚(アクセント)を變せしむ。たとへば「ドノレ」(孰)「ドノコ」(何處)「ヘイシ」(兵士)「カノヅク」(華族)などにクラ井のそふときは「トレクラ井」「ドコクラ井」「ヘイシクラ井」「カヅククラ井」となるがごとし。「ドノレクラ井」「ドノコクラ井」などとはいはぬなり。此の如く始の音にアクセントある詞にそふときは必その音をしてアクセントなからしむるなり。

ナガラ　体詞はナガラをそふるときはその体詞のあらはす事物なりといへどもといふほどの意となる、女ナガラ勉强シテ、男ナガラ男泣キニなどの女ナガラ、男ナガラなどの如し。

体詞を形狀詞にする語尾變化をいはむ。(六十六頁參考)

ッテナ　体狀はッテナといふ語尾をそふれはト云フヤウナといふ意の形狀詞となる。御殿ッテナ所、神社ッテナ所などの御殿ッテナ、神社ッテナなどの如し。ッテナはト云フ樣ナといふ詞より來れる語尾なり。

ンッテナ　ナドといふ助辭のそへる体詞はナドのドを變してンッテナとすれはナドト云フヤウナといふ意の形狀詞となる。たとへは御殿ナンッテナ所、神社ナンッテナ所の御殿ナンテナ所、神社ナンッテなどの如し。ナンッテナはナドト云フ樣ナより來れるものなり。ナンッテナをナンテナと今樣の小說家などは多く書くめれどそは誤なり。

造体詞　体詞はまた三樣の方法によりて異なる体詞を造ることをう。

三樣の方法の一は二個以上の体詞を熟合せしむることこれなり。十と一とを合せて十一とし、明治と元年と合せて明治元年とし、文法的と關係とを合せて文法的關係とするが

如し。

その二は助辭を附することとこれなり。いまその助辭のれものなるものをあげむ。（五十九頁六十頁參考）

グルミ　体詞は之にグルミといふ助辭をそふれば附屬物を包含せる狀態をあらはす体詞となる。たとへは箱グルミ、入物グルミなどの如し。

ゴト　グルミに同じ箱ゴト、入物ゴトなどのごとし。

カラ　体詞は之にカラを附すればうの始まる所をあらはす体詞となる。此カラハ僕ノ物ダ、其カラガ面白イのコレカラ、ソレカラなどの如し。カラはものの境界をあらはす助辭にして多くは次のマデと共に用ゐらる。

マデ　体詞はマデを附すればものの終るところをあらはすことばとなるコレマデハ善イ、ソレマデガ長イなどのコ

レマデ、ソレマデなどの如し。マデはカラと共に境界をあらはす助辭なり。此のカラれよひマデは造体詞の助辭なれどされにより て作られたる体詞は形狀詞（重に副詞）として用ゐらるゝこと多し。三時カラ行く、四時マテ勉强スルなどの如し。

ト　体詞はトを附して二個以上連續せしむることをう。君ト僕ト行ッタ、上野ト淺草ヘ行ッタなどの如し。文章にては必下の体詞にトを附すれども俗語にては下の体詞は附することも附せざることもあり。

ヤ　トと大抵なじやうなれどヤによりて連ねられたる体詞はその体詞のあらはす事物以外に尙他物をも含むをあらはす。君ヤ僕ハ行ッタといふときは行きしものゝ必しも君僕のみにかぎらざるをあらはすが如し。

ニ　トに大抵ひとし。されどトは物と物と並立するをあ

らはしニは物に物のそふをあらはす。行ダノハ君ニ僕デスなどの如し。君に僕をそへていふなり。

カ　疑問の体詞はカを附すれば不定の体詞となる。何、誰にカを附して「何カ」「誰カ」などいふがごとし。又數をあらはす体詞はカを附すればその數の確ならざるをあらはす。二ツカ有ル、三ツカ有ルの「二ツカ」「三ツカ」などの如し。

カはまた二個以上の体詞をつらぬるおとあり。梅カ櫻カチ見ル、山カ川ニ遊ブなどの如し。トが並立的に体詞をつらぬるに比して、カは離接的に体詞をつらぬ。トカなどにつられたる体詞は文法上一詞とみるべきものなり。

ヤラ　疑問の体詞を不定にすることカにれなじ。誰ヤラガ云ッタ。何ヤラガ有ルなどのごとし。

コ　体詞はコ(子)といふ頭辭を附ずるときは小才子小金などの如くその体詞のあらはす形狀の分量の少なきをあらはす。

ヶ　計數をあらはす体詞は之にヶ(箇)を附すれは號數をあらはす体詞となる。一ッ、二ッを一ッヶ、二ッヶなどいふがおとし。

タイ　ヶにひとし。但し頭辭にして漢語の第なり。第一、第二などの如し。

第二項　用詞の偶有的職任

用詞(動詞形狀詞)の偶有的職任には使被、能待遇、定、時、智度、說、格、意制限嘆否等あり。

用詞の偶有的職任は主として語尾變化および助辭により て示し、また助用詞(即助動詞：十三頁及五十三頁參考)によるおとあり。又稀に は詞の熟合、別語及文法的關係を以てすることあり。

用詞の中その詞自らよく使被、能待遇、定、時、智度、說、格、嘆否、制限を皆あらはしうるものを動詞といふ。

然るに用詞の中には語尾變化の少きために他の詞（助用詞など）を附するにあらざれば使被能の一部なる可能、定の一部なる否定意の一部なる命令をあらはすこと能はざるものあり。之を形狀詞といふ。たとへば行ク、歸ル等は動詞にして行カセル、歸ラセル（使動）、行カレル、歸ラレル（被動）、行ケル、歸レル（可能）、行カナイ、歸ラナイ（否定）、行ケ、歸レ（命令）等の如くいひうれとも、善イ、惡イ、遠イ、近イ、遙ニ、幽ニなどの如きは他の詞（助用詞など）を附するにあらざれはかく、使被、可能、否定、命令等をいひあらはすこと能はざるがごとし。（二十頁より十頁まで略す）形狀詞中助辭の助をかるにあらざれは格中の副詞格以外をあらはすことあたはざるものを世に副詞といひ、その然らざる形狀詞を形容詞といふ。

動詞は作用存在をあらはすものなるを以て使被、可能、否定、命令等をいひあらはす必要あれど、形狀詞は形狀をあらはすものなるを以て使被、可能、否定、命令等をいひあらはす必要殆なく、またその必要あれば形狀詞自らその職任をあらはさゞるも迂遠ながら助用詞の助をかるなど他の方法あるを以て形狀詞はこれらの職任をあらはす方法發達せざりしなり。たとへば善イといふ形狀詞を使被の意をあらはさしむるには善ク有ラセル、善ク有ラレルなどいひ、可能の意をあらはすには善ク有レル、善イト云フコトガ出來ル、善クナクテハナラナイなど、否定の意をあらはすには善ク無イ命令の意をあらはすには善クアレヨ、善クテ下サイなどいひうるが如し、

用詞の偶有的職任をとくにさきたちてまづその偶有的職任をあらはす主たる方便となる語尾變化、助辭をとかさるべからず

用詞の語尾變化

用詞の語尾は縱横に變化す。例へば知ルといふ用詞は縱に變化して

知ら　知り　知って　知る　知れ　知りゃあ

なぞともなり又横に變化して

知らう
知らん
知つた
知りゃあがる
知るんた

なぞともなる。此の知ラウ、知ラン、知ッタ、知リャアカル知ルンダはまた横に變化して

知らう
知らん
知って　知った　知ったら　知ったらう
知りゃあがら　知りゃあかって　知りゃあがる　知りゃあがれ
知りゃあがりゃあ
知るんで　知るんた　知るんたらう　知るんなら

なぞともなり逐次限なく變化す。

此の如く我が日本語の用詞は縱横自在に變化してよく語法上の偶有的職任をあらはすものなり。吾人はその變化を區別して縱横の名を附し、その縱的變化を活用といひその語尾を語尾を活段といひ、その横的變化を轉用といひその語尾を

活行といふ。

縱的變化即活用は「格」及「意」をしめし又は助辭に續き、横的變化即轉用は時、定、待遇等の諸職任を示すものなり。而して爾余の職任は助辭助動詞等によりて之を示す。

用詞の語尾變化はその變化の摸樣によりて之を動詞活、形狀詞活の二つとす。

動詞活

動詞活とは使被、待遇、定、時、知度、說、格、嘆否等用詞の有すべき凡ての職任をあらはしうる語尾變化なり。その動詞活にはたらく用詞を動詞といふ。(百二十八頁參考)

用詞の中には語尾變化多きものあり、少きものあり、然れども假にその縱的變化に七個の形式を設け横的變化に五個の形式を設け凡ての語尾變化を之に配す。

縱的變化即活用の七形式中その第一活段はレル、ラレル、セル、サセル、ナイ、マイ、ズ、ヌ、ナンダ等の助辭につゞくもの、その第二活段は重格、副格(後に出づ)をあらはし又はマス、ナサル、タイ、ナガラ、ガテラ、ツ、等の助辭につゞくもの、その第三第四活段は終止格及連体格をあらはすもの、その第五活段はバといふ助辭に續くもの、その第六活段は命令をあらはすもの、その第七活段は接續格をあらはすものなり。

横的變化即轉用の五形式中、第一轉用は否定をあらはすもの、第二轉用は未來を表はすもの、第三轉用は過去をあらはすもの、第四轉用は卑遇をあらはすもの、第五轉用はあとなる用詞となるものなり。

動詞格はその變化の狀態によりて四段活、一段活、加佐行變格及雜活の三種とす。

四段活

四段活とは阿列(a)伊列(i)宇列(u)江列(e)の四母音により て變化する語尾變化なり。いまその表をかゝぐ

	縱的變化		横的變化		
〔書〕	カ	第一段活	第一轉用(雜活)	カン	クンダ
〔殺〕	ガ	第二段活 一	第二轉用(雜活)	ガン	ンダ
〔指〕	サ	第二段活 二	第三轉用(雜活)	サン	スンダ
〔立〕	タ	第三段活	第四轉用(四段活)	タン	ツンダ
〔云〕	ワ	第四段活	第五轉用(雜活)	ワン	ウンダ
〔飛〕	バ	第五段活		バン	ンダ
〔住〕	マ	第六段活		マン	ムンダ
〔知〕	ラ	第七段活		ラン	ルンダ
〔死〕	ナ			ナン	ヌンダ

	イテ		イタ	キャガル	クンダ
	イデ		イダ	ヤガル	ンダ
	シテ		シタ	シャガル	スンダ
	ッテ		ッタ	チャガル	ツンダ
	ッテ		ッタ	ヤガル	ウンダ
	ンデ		ンダ	ビャガル	ンダ
	ンデ		ンダ	ミャガル	ムンダ
	ッテ		ッタ	リャガル	ルンダ
	ンデ		ンダ	ニャガル	ヌンダ

	ケ		ケ	キャア	
	ゲ		ゲ	ギャア	
	セ		セ	シャア	
	テ		テ	チャア	
	エ		エ	ヤア	
	ベ		ベ	ビャア	
	メ		メ	ミャア	
	レ		レ	リャア	
	ネ		ネ	ニャア	

單に四段活といふといへども加行、我行、佐行、多行、和行、婆行、麻行、良行、奈行れの〳〵その變化を異にすること右の表の如し。つまり四段活はその變化に九樣の別あるなり。全然同一變化なりと思ふべからず。

文章語にて四段活、良行變格、奈行變格にはたらくものは口語にては皆四段活にはたらくなり。

右の表の第一第三第四第五の活段は文章語の第一第三第四第五の活段より來れるもの、その第六活段は文章語の第五活段より來れるもの、その第七活段は第五活段にバといふ助辭を附したるもの〻音便にてつゞまれるものなり。

右の表中第二活段に一、二の二樣あり。その一は文章語の第二活段より來れるもの、その二は之にテといふ助辭のそへるもの〻變じたるものにして、いづれも文章語の第二活段と同一の職任をあらはすものなり。

口語にありては第三第四の活段は全く同一なれど文章語の活用表と對照する便をはかりて同一語形を第三第四と區別せるなり。他意あるにあらず。

横的變化の第一、第二、第三、第五の轉用は雜活に轉用するものにして第四轉用は良行四段活に轉用するものなり。

一段活

一段活とは伊列（i）又は江列（e）の音によりて變化する語尾變化なり。今左に一段活の表をかゝぐ

縱的變化

第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段	第六活段	第七活段	第一轉用（雜活）	第二轉用（雜活）	第三轉用（雜活）
一	二								
〔用〕 イ	イ	イテ	イル	イレ	イロ	イリヤア	イン	イヨウ	イタ
-i	-i	-ite	-iru	-ire	-iro	-irya	-in	-iyoo	-ita
〔受〕 ケ	ケ	ケテ	ケル	ケレ	ケロ	ケリヤア	ケン	ケヨウ	ケタ
-e	-e	-ete	-eru	-ere	-ero	-erya	-en	-eyoo	-eta

横的變化

第四轉用（四段活）	第五轉用（雜活）			
イヤガル	イルンダ			
-iyagaru	-irunda			
ケヤガル	ケルンダ			
-eyagaru	-erunda			

文章語にて、上一段上二段、下一段、下二段にはたらくものは口語にてはみなとの一段活にはたらくものなり。

此の表にては第二轉用のヨウ、第三轉用のヤガルは助辞のことくみゆれどその助辞ならずして語尾なるゆゑ四段活の言ヤアガル、書キヤアガルなどのヤアガルカ助辞ならぬにてしるべし。

四段活の第六活段は第五活段と同形なれども一段活の第六活段は第一活段にロをそへたるものなり。

一段活は第一活段と第二活段と同音異職なり。第三活段と第四活段と同音異職なるは口語の詞動にありては凡ての活用皆然り。

加佐行變格活

加佐行變格活とはクル、御座ンスれよびスルといふ詞の語

尾變化をいふ。

	第一活段	第二活段 一	第二活段 二	第三活段/第四活段	第五活段	第六活段	第七活段	第一轉用(雜活)	第二轉用(雜活)	第三轉用(雜活)	第四轉用(四段活)	第五轉用(雜活)
	縱的變化							橫的變化				
[來]	コ	キ	キテ	クル	クレ	コイ	クリャア	コン	コヨウ	キタ	キャアガル	クルンダ
[爲]	シ	シ	シテ	スル	スレ	シロ	スリャア	セン	ショウ	シタ	シャアカル	スルンダ
[御坐ン]	セ	シ	シテ	ス	スレ	○	スリャア	セン	ショウ	シタ	シャアガル	スンダ

スルといふ詞は純粹の東京語に於ては右の如くはたらくものなれども(但し第一轉用は凡て純粹の東京語にあらず)他地方より入りたるものとして左の如くも活かさるにあらず。

[爲]	セ	シ	シテ	スル	スレ	シロ	スリャア	セン	ショウ	シタ	シャアガル	スルンダ

雜活

雜活とは四段、一段、加佐行變格以外の語尾變化を總稱していふなり。而してみな助辭又は轉用なり。

	第一活段	第二活段 一	第二活段 二	第三活段/第四活段	第五活段	第六活段	第七活段	第一轉用(雜活)	第二轉用(雜活)	第三轉用(雜活)	第四轉用	第五轉用(雜活)
	縱的變化							橫的變化				
[助辭]	マセ	マシ	マシテ	マス	マスレ	マセ	マスリャア	マセン	マセウ	マシタ	○	マスンダ
	○	デシ	デシテ	デス	テスレ	○	デスリャア	○	デセウ	デシタ	○	デスンダ
	○	○	デ	ダ	ナラ	○	ナラ	○	ダラウ	ダッタ	○	○
	○	○	○	ダック	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	ダッケ	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	ナンダ	ナンダラ	○	ナンダラ	○	ナンダラウ	ナンダッタ	○	ナンダンダ
	○	○	○	マイ	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	ダラウ	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	デセウ	○	○	○	○	○	○	○	○
[轉用二]	○	○	○	ウ	○	○	○	○	○	○	○	○
[同 二]	○	○	○	ヨウ	○	○	○	○	○	○	○	○
[轉用三]	○	○	テ	タ	タラ	○	タラ	○	タラウ	タツタ	○	タンダ
[轉用五]	○	○	ンデ	ンダ	ンナラ	○	ンナラ	○	ンダラウ	ンダッタ	○	○
[同 五]	○	○	ンデシテ	ンデス	ンデスレ	○	ンデスリャア	○	ンデセウ	ンデシタ	○	ンデスンダ

ダと同しはたらきにサウダといふ助辭あり

轉用二とあるは凡ての詞の第二轉用はみなおの活用をなすを示す同三、同五とあるも推して知るべし。

形狀詞活

形狀詞活とは使被、可能、否定、命令をあらはすおと能はざるべき語尾變化なり。その形狀詞活にはたらく用詞を形狀詞といふ

但したとへ使被等をいひあらはすことと能はぎといへどもその之を云ひあらはすことあるべからざるか又は元來之をいひあらはしうべきも或る活段の語形の欠けたるがために之を云ひあらはしなさるものは形狀詞活にあらずして動詞活なることを忘るべからず。たとへば行カウ、歸ラウなどのウの如きは語法上使被以下をあらはすべき形式にあらず。行クンダ、歸ルンダのンダの如きは第一第五第六の活段の欠けたるために使被以下をあらはさざるがごとし。

これらは形狀詞活にあらぎして動詞活なるなり。

形狀詞活に久活、爾奈活、能活、雜活あり。又無變化の者あり。

久活

縱的變化

第一活段	〔無〕	○
第二活段	一	クテ
	二	ク(ウ)
第三活段		イ
第四活段		ケレ
第五活段		○
第六活段		ケリ(ケア)
第七活段		○

横的變化

第一轉用(雜活)	カラウ	○
第二轉用(雜活)	カッタ	○
第三轉用(雜活)		ィンダ
第四轉用		
第五轉用(雜活)		

文章にて久活及志久活にはたらくものは口語にてはみな久活にはたらくものとす。但し善イといふ詞のみは雜活なり。

第二活段二のクの下にウとあるは御坐ンス、御坐ィマスな

といふ語に續く時にのみ用ゐらるゝなり。寒ウ御坐ンス、高ウ御坐イマスなどの如し。寒ク御坐ンス高ク御坐イマスともいふなり。

第七活段の下にキャアとあるは普キャア、無キャアの如くいひうる詞あるを示す。

久活は形狀詞活中最自由なる語尾變化なり。從來形狀言といひしは久活（赤久活も）のみをさすものなり。

爾奈活

爾奈活はニ、ナと變化する語尾變化なり。

縱的變化	第一段活	○		
	第二段活	ニ	一	
	第三段活	ナ	二	
	第四段活	○		
	第五段活	○		
	第六段活	○		
	第七段活	○		
橫的變化	第一轉用	○		
	第二轉用	○		
	第三轉用	○		
	第四轉用	○		
	第五轉用（雜話）	○ ナンダ		

遙、速、幽、長閑などの如きみなこの活なり。

形狀をあらはす体詞はすべて之を形狀詞の語体とみなして之にニ、ナを附すれば形狀詞となるものなり、

能活

能活とは第四活段のノとなる活なり。

縱的變化	第一段活	○		
	第二段活	○	一	
	第三段活	早速	二	
	第四段活	○		
	第五段活	早速ノ		
	第六段活	○		
	第七段活	○		
橫的變化	第一轉用	○		
	第二轉用	○		
	第三轉用	○		
	第四轉用	○		
	第五轉用	○		

隨分、又、再、昔今、嘗などいふ詞みなこれに屬す

雜活

雜活とは以上三種以外種々の語尾變化を總稱としていふなり。

縱的變化

	段活一第	段活二第	段活三第	段活四第	段活五第	段活六第	段活七第
一	○	○	ソンナニ○	ソンナ	ソンナラ	○	○
二	○	○	アンナニ○	アンナ	○	○	○
(助辭)	○	ヨクテ(ヨツ)ヨク(ヨツ)ズ ズニ	イト	イト	ヨケレ	ヨケリ ナア(ロキナア)	ニヤ
		ヌ	ヌ				ア

ソンナとれなしはたらきの詞にコンナあり。アンナと同しはたらきの詞にドンナあり

又活かざるものあり。靜々ト、早々ト、其ノ、此ノ、或ルなどの如もされどこれらは第二活段又第四活段に相當す。

横的變化

	用轉一第	用轉二第	用轉三第	用轉四第	用轉五第
段活一第	○	○	○	○	○
段活二第	○	○	○	○	○
段活三第	靜々ト ○	○	○	○	○
段活四第	○	○	○	○	○
段活五第	其ノ ○	○	○	○	○
段活六第	○	○	○	○	○
段活七第	○	○	○	○	○
(雜活)		用轉二第	用轉三第	用轉四第	用轉五第
(雜活)				ソンナンダ	ソンナンダ
				アンナンダ	アンナンダ
(雜活)				ヨカラウ ヨカツタ	イトンダ
				ナンダ	○

用詞の助辭

今左に用詞にそふ助辭の表をかかぐ。片假名もてかけるは動助辭にて平假名もてかけるは靜助辭なり。

動詞に添ふ助辭

セル(一段活)	行カセル	歸らセル	
サセル(一段活)	逃げサセル	受けサセル	
レル(一段活)	行カレル	歸らレル	
ラレル(一段活)	逃げラレル	受けラレル	
以上使被を表はすもの			
レル(一段活)	行カレル	歸らレル	
ラレル(一段活)	逃げラレル	受けラレル	
エル(一段活)	行きエル	歸りエル	
以上能を表はすもの			

レル（一段活）　行かレル　歸ラレル

ラレル（一段活）　逃げラレル　受けラレル

マス（動詞活の雜活、百四十七頁）　行きマス　歸リマス

お（頭辭）　オ行きなさる　オ歸りなさる

で（頭辭）　ご勉強なさる　ご臺力なさる

以上待遇をのはすもの

ナイ（文活）　行かナイ　歸ラナイ

ヌ（形狀詞活の雜活、百五十二頁）　行かヌ　歸らヌ

ナンダ（動詞活雜活、百四十七頁）　行かナンダ　歸らナンダ

マイ（動詞活の雜活、百四十七頁）　行くマイ　歸るマイ

以上定をあらはすもの

ナンダ（動詞活の雜活、百四十七頁）　行かナンダ　歸らナンダ

マイ（動詞活の雜活、百四十七頁）　行くマイ　歸るマイ

以上時をあらはすもの

ダラウ（動詞活の雜活、百四十七頁）　行くダラウ　歸スダラウ

デセウ（動詞活の雜活、百四十七頁）　行くデセウ　歸るデセウ

以上知度をあらはすもの

サウダ（ダの活に同じ）　行くサウダ　歸るサウダ

サウデス（デスの活に同じ）　行くサウデス　歸るサウデス

以上說をあらはすもの

し　雨は降るシ笠はなし

は　雨が降れバ

ならば　雨が降るナラバ

って　雨が降つたテ

ゃ　雨が降るか

のに　雨が降るノニ

以上格をあらはすもの

人が行く
君行くナ
君行きタマヘ

花がさくヨ
花がさくナ
花がさくナア
花がさく子
花がさくチイ
花がさくテ
人が行くセ
人が行くゾ

か
な
たまへ

以上意をあらはすもの

よ
な
なあ
ね
ねい
て
せ
ぞ

以上嘆否をあらはすもの

知ってハ居る
知ってモ居る
知ってサヘ居る
知ってサイ居る
知ってスラ居る
知ってバカリ居る
知ってバッカリ居る
知ってバッカ居る
知ってバカシ居る
知ってバシ居る
知ってマテ居る
知ってコソ居る

は
も
さへ
さい
すら
はかり
はっかり
はっか
はかし
はっかし
まで
こそ

以上制限をあらはすもの

ナイ（久活）　云はナイ　思はナイ

ヌ（形狀詞活の雜活、百五十二頁）　云はヌ　思はヌ

ラシイ（久活）　云ふラシイ　思ふラシイ

タイ（久活）　云ひタイ　思ひタイ

ナガラ（能活）　云ひナガラ　思ひナガラ

ガテラ（能活）　云ひガテラ　思ひガテラ

ツヽ（能活）　云ひツヽ　思ひツヽ

以上動詞を形狀詞活にするもの

形狀詞に添ふ助辭

れ　お　ゴ苦勞な　オ美しい　ゴ親切な

以上待遇をあらはすもの

ダラウ（動詞活の雜活、百四十七頁）　善いダラウ　悪いダラウ

デセウ（動詞活の雜活、百四十七頁）　善いデセウ　悪いデセウ

以上知度をあらはすもの

サウダ（ダの活に同じ）　善いサウダ　悪いサウダ

サウデス（デスの活に同じ）　善いサウデス　悪ヒサウデス

以上說をあらはすもの

し　風は寒いし　雨はふるし

ば　風が寒ければ

ならば　風が寒いナラバ

が　風は寒いが

のに　風の寒いノニ

以上格をあらはすもの

か　月がいゝカ

以上意をあらはすもの

せ	月がいゝセ
ぞ	月がいゝゾ
や	其はひどいヤ
よ	其はひどいヨ
な	其はひどいナ
なあ	其はひどいナア
ね	其はひどいネ
ねい	其はひどいネイ
て	其はひどいテ

以上嘆否をあらはすもの

は	早くは行くが
も	早くモ行くが
さへ	早くサヘ行けば
さい	早くサイ行けば
すら	早くスラ行くのに
ばかり	早くバカリ行く
ばっかり	早くハッカリ行く
ばっか	早くバカッ行く
ばかし	早くバカシ行く
ばっかし	早くバッカシ行く
まで	早くマデ行くのに
こそ	早くコソ行ク

以上制限をあらはすもの

ガル（四段活）	嬉しガル　聴しガル

以上形狀詞活を動詞活に變するもの

用詞の使被

用詞の使被とは用詞の一職任にしてうの用詞のあらはす作用が自らする作用なりや他に與ふる作用なりや他より受くる作用なりやを區別するものなり。

動詞（動詞活の用詞に活く用詞）は使被をあらはすことをうれども形狀詞（形狀詞活）は使被をあらはすことをうず

使被を分ちて原動、使動、被動の三つとす。

原動　原動とは自らする作用をあらはす職任なり。人ガ行ク、私ガ云フの行ク、云フなどの如きは即此の職任なり

人、私ガ他をして行かしめ云はしむるにも他に行かれ云はらるゝにもあらず。たゞ人私みづから行き、云ふをあらはすなり。原動は未だ使被に關する變化をうけざる形を以てあらはす。

使動　使動とは他をしてせしむる作用をあらはす、職任なり、たとへば人ニ行カセル、私ニ云ハセルの行カセル云ハセルなどの如し。使動をあらはすには四段活にはその第一活段にセル（一段活）を附す、行カセル、云ハセルなどの如し。他の活の動詞には第一活段にサセル（二活段）を附す。逃ケサセル下リサセルなどの如し。加佐行變格のスルといふ詞にかきりシサセル（又はセサセル）といふべきをサセルといふこと多し。

被動　被動とは他にせらるゝ作用をあらはす職任なり。人ニ行カレテ困ッタ、私ニ云ハレタッテイイ・の行カレル、云ハレルなどの如し。被動をあらはすには四段活にはレル（活段、第百五十三頁）を附す、行カレル、云ハレルなどの如し。他の活の動詞にはラレル（一段活百五十三頁）を附す。逃ケラレル、下リラレルなどの如し。加佐行變格のスルといふ詞にかぎりシラレル（又はセラレル）といふべきをサレルといふこと多し。

用詞の能

能とは實際の作用と可能の作用とを區別する職任なり。能を分ちて實事、可能の二つとす

動詞は能をあらはせども形狀詞はその語尾變化上能をあらはさず

實事　實事とはある作用の實際に於てあらはるゝをあらはすものなり。私ハ字ヲ書ク、アナタハ本ヲ讀ムの書ク讀ムの如し。實事は未だ能の變化をうけざる形を以て之をあらはす

可能　可能とは或る作用のあらはれ得べきをあらはす職任なり。私ハ此ノ字ヲ書カレル、此ノ本ヲアナタハ讀マレル、此ノ字ヲ我ハ書ケル、此ノ本ヲアナタハ讀メルの書カレ、讀マレル、書ケル、讀メルなどの如し。

可能をあらはすには第一活段にレル又はラレルを附す。讀マレル、逃ケレル、逃ケラレルなどの如し。但しラレルは四段活にはそはず。讀マラレルといはれぬがことし。四段活にレルを附するときは第一活段の語尾とレルのレと合して一音となること少からず。書ケル、讀メルのごときは書カレル讀マレルのつゝまれるなり。かくつつまれるものは一の轉用とみることをうべし。之を轉用とするときは第六轉用にをさむべきなり。

レル、ラレルによりてつくれる可能は用る方によりて原動の可能とも被動の可能ともなる。たとへば「此の本を私が讀マレル」の讀マレルは「私」自らする作用の可能なるをあらはすを以て原動の可能なれど、「此の本が私に讀マレル」の讀マレルは「本」が「私」にせられたる作用の可能なるをあらはすを

以て被動の可能なるがおとし。

又助用詞（第五十三頁）によりて可能をあらはすおとあり。「讀ンテハイケナイ」「讀マナケレバナラナイ」などのごとし。イケナイナラナイなどの助用詞なり。

又詞の熟合（第五十四頁）によりて第二活段にエル（一段活）といふ動詞を附して可能をあらはすことあり。讀ミエル書キエルなどのおとし。

用詞の待遇

用詞の待遇とは用詞の一職任にしてうの用詞の用法によりてある事物に對する講話者の尊卑の念をあらはすものなり、（第六十七頁參考）

待遇に尊遇、卑遇、不定遇の三者あることなは体詞の對遇にけるがおとし。

用詞の待遇はその待遇の對象（尊卑せらるゝ事物）の如何によりて之を四つに分ちて主体待遇、所有待遇、對者待遇、關係待遇といふこの三者みな尊、卑、不定に分たる。自家待遇は体詞には存すれども、用詞には存すべき理なし。

主体待遇

用詞の主体待遇とはその用詞のあらはす作用の主体たるべき事物に對する尊卑の念をあらはすものなり。

主体尊遇　用詞のあらはす作用形狀の主体たるべき事物を尊ぶ意をあらはす職任なり。先生はオ歸リナスッタ、アノ方ハオ行キアソバシタなどのおとし。歸ル、行クといふ作用の主体を尊む意をあらはせり

動詞は第一活段にレル（一段活、百五十四頁）ラレル（一活段百五十四頁）を附すれ

は主体尊遇となる。先生ガ行カレ、來ラレルなどのごとし。レルは四段活にのみそひ、ラレルは他の活にのみそふ

又動詞は上にオ（御、百五十四頁）ゴ（御、百五十四頁）といふ頭辞を附し、下にナサル、アソバスなどの如き動詞を附して主体尊遇をあらはすことあり。オ行キナサル、オ歸リアソバス、御覽ナサル、御免ナサルなどの如し、オは主として固有の大和詞にそひ、ゴはその字音なるからに主として漢語にそふ

形狀詞はオ（御）、ゴ（御）を前附するふことによりて主体尊遇をあらはす。オ美シイ、オ早イ御苦勞ナ、御親切ナなどのごとし。オは主として固有の大和詞にそひ、ゴは主として漢語にそはる。漢語といへども立派ナ、丈夫ナなどの如く充分同化せられたるものにはオをそふ。オ立派ナ、オ丈夫ナなどのごとし。

主体卑遇　主体卑遇とは用詞のあらはす作用形の狀主体たる事物を卑む意をあらはすものなり。アイツハ行キヤアガッタ、誰ガシヤアガッタンダの行キ、ガッタ、シヤアガッタなどの如し。行ク、スルといふ作用の主体なるアイツ、誰を卑む意をあらはせり。

主体卑遇をあらはすには動詞活の用詞はその第四轉用を以てす。行キヤアガル、シヤアガルなどのごとし。而して此のヤアガルがまた四段活に變化す。

形狀詞活の用詞は第四轉用なし。形狀詞は主体卑遇をあらはすことあたはず。

主体不定遇　主体不定遇とは用詞のあらはす事物を尊みも卑みもせざるものなり。行ク、カヘル、早イ、遲イなどのごとし。

用詞の關係待遇とはその用詞のあらはす作用形狀の客体に對する尊卑の念をあらはすものなり。

關係尊遇　用詞のあらはす作用形狀の客体を尊ふ意をあらはす職任なり。私ハアノ方ニ御禮スル、オ前ハアノ方ヲ御助ケ申セ、私ハ之ヲアナタカラ戴キマス、此所ハ御殿ヘ御近イ、私ハ殿樣ト御同年ノ人の「御禮スル」「御助ケ申ス」「戴ク」「御近イ」「御同年ノ」などの如し。皆その客体たるアノ方、アナタ、御殿、殿樣を尊ふ意をあらはせり。

用詞中關係尊遇の名詞（第七十六頁）より來れる用詞は關係尊遇なり。たとへは前例の御禮スル、御同年のなどの如し。

動詞の中に元來關係尊遇の意あるものあり。申ス、サシ上ゲル、戴ク、進呈スルなどの如し。前例の御助申スの如きは關係尊遇の名詞に關係尊遇の用詞の熟合してなれる用詞なり。

又多數の形狀詞は之にオ（御）を前附すれは關係尊遇となる。オ近イ、オ輕イなどの如し。

關係卑遇　作用の客体を卑む意を表はす職任なり。遣ハス（與ヘる意）教ヘテ遣ハス、言ッテ遣ハスなどの如し。

關係不定遇　用詞のあらはす作用形狀の客体を尊卑せざる職任なり。未關係待遇に關する變化をうけざる形を以て之をあらはす。禮スル、助ケル、貰フ、近イ、同年ノなどのおとし。

對者待遇

用詞の對者待遇とは用詞に屬する一偶有的職任にして談話の對者に對して談話者か感する尊卑の念をあらはすものなり。

對者尊遇　對者尊遇とは談話を聽くべき人に對する

尊む意とあらはす職任なり。私ハ行キマス、ソンナ奴ハ參リマセン、其ナラバ御座イマス、コレハ花デスの行キマス、參リマス、御座イマス、花デスなどの如し皆談話をきく人に對する尊敬の意をあらはせり。

對者尊遇をあらはすには動詞はすべてその第二活段にマス（雜話、第百四十七頁）を附す、行キマス、歸リマスなどの如し。

動詞にはもとより對者尊遇の意あるものあり。參ル、致ス、申ス、御座ル、ゴス、ゲスなどの如し。但しこれらに更にマスを附することあり。

動詞形狀詞の轉用第五のンダは對者不定遇なれども之をンデスにかふれば對者尊遇となる行クンデス、歸ルンデスなどのごとし。

体詞にデス（第五十九頁）（雜話第百四十七頁）をそへてつくれる動詞はすべて對者尊遇なり。花デス、雪デスなどのごとし。

デセウ、サウデス（第百五十五頁、第百五十九頁）などの助辞のそへる動詞形狀詞はすべて對者尊遇なり。

〔對者卑遇〕　談話の對者を卑めていふ職任なり。用詞には此の職任をあらはす方法缺けたり。

對者不定遇　談話の對者を尊卑せざる職任なり。對者待遇に關する變化を未少しもうけざる形を以て之をあらはす。行ク、來ル、有ル、無イ、花ダ、雪ダなどのごとし。

- 用詞の待遇
  - 主体待遇
    - 主体尊遇　行かレル、教ヘラレル、お行きナサル、ご勉強アソバス、お早い、ご親切な
    - 主体卑遇　行きヤガル
    - 主体不定遇　行く
  - 關係待遇
    - 關係尊遇　お行きマウス、お敬く、申す、お禮する、ご返禮する、お近い、
    - 關係卑遇　つかはす
    - 關係不定遇　行く
  - 對者待遇
    - 對者尊遇　行きマス、參る、申す、御坐んす
    - 對者卑遇　○
    - 對者不定遇　行く

主体待遇對者待遇關係の表

主体不定遇	主体尊遇	主体卑遇
行く	お行きなさる	行きゃあがる
早いだらう	お早いだらう	○

對者不定遇	對者尊遇	對者卑遇
行きます	お行きなさいます	行きゃあがります
早いでせう	お早いでせう	○

關係待遇對者待遇關係の表

關係不定遇	關係尊遇	關係卑遇
やる	あげつ	つかはす
早い	お早い	○

對者不定遇	對者尊遇	對者卑遇
やります	あげます	つかはします
○	○	○

用詞の定

用詞の定とは用詞のあらはす作用形狀の存在すやいなやをあらはす職任なり。定を分ちて肯定否定の二つとす。

肯定　用詞の肯定はそのあらはす作用形狀の存在するをあらはす職任なり。花ガ散ル、月ガ出ルの散ル出ルなどの如し。散ル、出ルといふ作用の存在するをあらはせり。

肯定は用詞の原形を以て之をあらはす。前例の散ル、出ルなどのことし。

否定　用詞の否定とはそのあらはす作用形狀の存在せざるをあらはす職任なり、花ガ散ラナイ、月ガ出マセヌの散ラナイ、出マセヌなどの如し。散ル、出ルといふ作用の存在せざるをあらはせり。

否定をあらはすには動詞はナイ（久語）ヌ（形狀詞活、雜活、百五十二頁）ナンダ（動詞活雜活、百四十四頁）マイ（動詞活雜活、百四十七頁）（百四十四頁）を後附す。散ラナイ、散ラヌ、散ラナンダ、散ルマイなどの如し。

又動詞はその第一轉用は否定をあらはす。散ラン、出ンなどのことし。但し第一轉用はマスをマセンといふより外は皆東京固有の云ひ方にあらず。

形狀詞は。みづから否定をあらはすゑと能はず。故に常に肯定なり。但しナイといふ助用詞をそふるときは善イ、惡イを善クナイ、惡クナイなどのごとく否定をあらはす。

用詞は否定に更に否定を加ふるゑとあり。散ラナクナイ、出ナクナイ、善クナクナイ、惡クナクナイなどのごとし。これらの詞に對しては散ラナイ、出ナイ、善クナイ、惡クナイは肯定なり。散ラナイ、出ナイなどは散ル出ルに對しては否定なれども、散ラナクナイ、出ナクナイなどに對しては肯定なるな

り。

用詞の時

用詞の「時」とは用詞に屬する一偶有的職任にしてうの用詞の表はす作用の存在する時の先後をあらはすものなり。時に話說時、事情時の二つあり。

話說時

話說時とは用詞の一職任にして說話を標準として（即談話し又は文章をかく人がその談話し又は文章をかく時を標準として）その用詞のあらはす作用形狀の存在する時の先後をあらはすものなり。たとへば、昨日私は行つた、私は明日行かうといへば、行ッタはかく話話する時を標準として行クといふ作用が過去に存在せしを示し、行カウは行クといふ作用の未來に存在するを示すが如し。話說時を分ちて、現在過去未來不定時の四とす。

現在　現在とは說話する時を標準としてその用詞のあらはす事實がその說話と同時（即現在）なるを示すものなり。たとへば私ハ今行ク、アレ花ガ散ル、御覽花ノ美シイ　の行ク、散ル、美シイなどのごとし。

現在は話說時に關する變化を未すこともうけざる形を以て之をあらはす。

過去　過去とは說話する時を標準としてその用詞のあらはす事實がその標準よりも過去に存在したるをあらはすものなり。私は昨日行ッタ昨日花ガ散ッタ、其の花ハ美シカッタの行ッタ、散ッタ、美シカッタなどの如しみなかくいふ時より過去にその事實の存在せしをあらはせり。過去は橫的變化の第三轉用を以てす。これらみな行ク、散ル、美シイの第三轉用なり。（第三轉用の活用は百四十七頁左より三行目をみよ）

又動詞活にかぎりナンダ（第五十四頁、動詞活雜活百四十七頁）を第一活段に附する時は否定の過去をあらはす。行カナンダ、散ラナンダなどのごとし。但し東京の言葉にあらず。

また體詞に、ダ（百十二頁、五十八頁、百四十七頁）といふ助辞のそひて用詞となれるものはダッタと第三轉用にいふべきをダッケといふことあり。人ダッケ、犬ダッケなどのごとし。但しダッケ（百四十七頁）を一の助辞とみることをうべし。

未來　未來とは話説をなす時を標準としてこの用詞のあらはす事實がその標準より未來に於て存在すべきをあらはす職任なり。私ハ明日行テ見ヨウ、此ノ風デハ花モ散ラウヨ、花ガ此ノ次ノ日曜アタリハ美シカラウヨの見ヨウ、散ラウ、美シカラウなどのおとし。皆かくいふ時よりは未來に於て存在すべきをあらはせり。

未來は第二轉用を以て之を示す。前例のごときはみな行ク散ル、美シイの第二轉用なり。（第二轉用の活用は百四十七頁轉用二にあるをみよ）

又動詞活（雜活なのみ）に限り第一活段又は第三活段にマイ（百五十四頁、百四十七頁）を附して否定の未來をあらはすことあり。シマイ、スマイ、行カマイ行クマイなどのごとし。

又用詞は確實なる意をあらはすとき又は次に未來をあらはす用詞あるときには現在と同じ形を以て未來をあらはすことあり。私は明日行く、四五日の中に花ガ散ル、此ノ次ノ日曜アタリハ花ガ善イ、花ノ咲ク時ニ參リマセウの行ク、散ル善イ、咲クなどのごとし。

不定時　不定時とは時に關係せずして云ひあらはすものなり。宗任ハ貞任ノ弟デアル、水ハ冷タイのアル、冷タイなどのおとし。話説時の變化をいまたうけざる形を以て之